タルコット・パーソンズにおける行爲体系理論の考察

田野﨑　昭夫

目　　次

Ⅰ．この論文について
Ⅱ．卒業論文本文「タルコット・パーソンズにおける行爲体系理論の考察」
1．タルコット・パーソンズについて――序に代えて――
2．第一章　行爲の概念
3．第二章　行爲の定位様式
4．第三章　体系的構成
5．結　語

Ⅰ．この論文について

私は昭和4年（1929年）に生まれて戦前の学制で教育を受けて来た。従って戦後も大学や大学院も旧制で，大学院は戦時中の特別研究生の後身である研究奨学生であった。しかし指導教授は退官されて私は博士の学位はとっておらず，文学士の学位しかない。従って私の学位論文は大学の卒業論文である。戦後間もない研究文献の入手しにくい頃，何とか書き上げて当時としては先駆的な論文であったといえる。現物は手許にあるがまだ活字にはなっていない。そこで本紀要に収載をお願いした次第である。

まず，卒業論文に貼りつけられた，論文審査教官の署名捺印のある卒業論文受理票の写真とその明示図を掲げる。社会学の指導教授だった新明正道教授と，新明教授が教職を離れている間，兼担した宗教学の石津照璽（てるじ）教授とが面接審査した。石津教授は授業でB.マリノフスキの文化人類学を講じた。

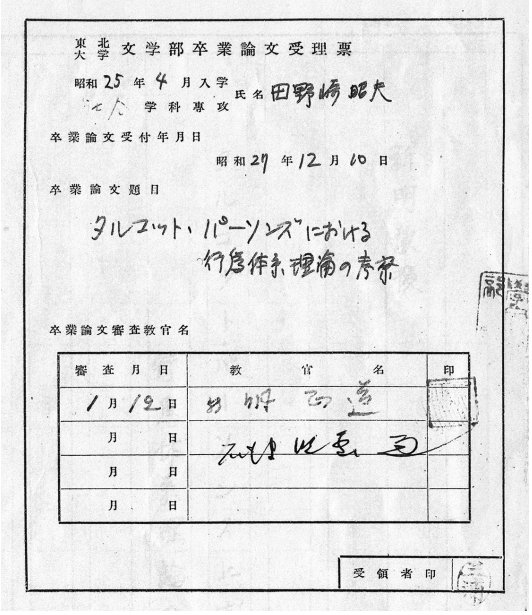
この卒業論文は縦書きであるが，本紀要では横書きにした。しかし見出し語などは漢数字のままにし，また註（注）は各章毎になっている。用字はそのままにした場合（例えば「言う」ではなく「云う」）と，現行の字に変えた場合（例えば「價値」ではなく「価値」）とがある。

Ⅱ．卒業論文本文「タルコット・パーソンズにおける行爲体系理論の考察」

田野﨑 昭夫

目　　次

タルコット・パーソンズについて
――序に代えて――
第一章　行爲の概念
第一節　行爲者
第二節　動機
第三節　行爲者＝状況体系
第四節　過程
第二章　行爲の定位様式
第一節　動機化的定位様式
第二節　価値定位様式
第三章　体系的構成
第一節　文化と行爲
第二節　人格と行爲
第三節　社会体系と行爲
結　語


東北大学 文学部卒業論文受理票

昭和25年4月入学 社会学科専攻 氏名 田野崎昭夫

卒業論文受付年月日

昭和27年12月10日

卒業論文題目

タルコット・パーソンズにおける行為体系理論の考察

卒業論文審査教官名

審査月日	教官名	印
1月12日	新明正道	
月 日	石津照璽	
月 日		
月 日		

受領者印

東北大学 文学部卒業論文受理票

昭和25年4月入学 社会学科専攻 氏名田野崎 昭夫

卒業論文受付年月日

昭和27年12月10日

卒業論文題目

タルコット・パーソンズにおける
行爲体系理論の考察

朱印

卒業論文審査教官名

審査月日	教官名	印
1 月 12 日	新明正道	朱印
月 日	石津照璽	花押
月 日		
月 日		

受領者印 朱印

1．タルコット・パーソンズについて
―― 序に代えて ――

タルコット・パーソンズ（Talcott Parsons1902−）は現在ハーヴァード大学の社会学の教授であるが，アメリカにおける理論的方面での第一人者だと云う。彼は夙にマックス・ウェーバーの研究者且つその著作の訳者として知られ，経済学の雑誌等で筆をとっていた。そして1937年，有名な極めて高度の，マーシャル，パレト，デュルケーム，M. ウェーバー等の学論の註釈書であり，併せて彼の「行爲的関連基構」（action frame of reference）の構想を示唆したところの，『社会的行爲の構造』（*The Structure of Social Action*）を出した。かくしてその後屡々社会学雑誌上で論文を発表していたが，次第に自己の構想をまとめつつあった。この間のものを蒐めたのが論文集 *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, 1949であった。そしてこの頃彼は1949−50年において社会学者，人類学者，及び社会心理学者との共同研究に参加した。そしてこの間に彼は大いに影響され，行爲の一般理論の上に，人格，社会体系，文化の云わば三権分立をするという体系の構想が作りあげられた。この間の経緯が，「社会学理論の展望」（The Prospects of Sociological Theory（*American Sociological Review*, 1950. Feb.））の論文である。そしてこの共同研究の成果が9人の学者の共同執筆である『行爲の一般理論のために』（*Toward a General Theory of Action*, 1951）である。彼はこの中でシルズ（E. Shils）と共に「行爲の価値，動機，及び体系（Values, Motives, and Systems of Action）を書いている。そしてこゝで彼は行爲の動機付け的定位（motivational orientation）の様式と，価値定位（value orientation）の様式を構成した。そして行爲の理論の具体的な三焦点の一つである社会体系について著述したのが『社会体系論』（*The Social System*, 1951）である。

彼はその経歴の示す如くアマースト（Amherst）大学卒業後，ロンドン大学に学び，ここでホブハウス，ギンズバーグ，マリノフスキに接し，ハイデルベルク大学に行き，ここでM. ウェーバーの遺した研究を知った。その他，彼はデュルケーム，

パレト等の理論を摂取し，この点でアメリカの社会学者で最も欧州の学風を身につけている一人だと云える。中でも彼にあっては，M. ウェーバーのドイツ観念論の流れを汲む傾向に強く，彼の著作の精緻な概念的構成がそれを物語っている。

この論文は彼の行爲理論の構成の考察を試みたものであるが，最初 *"The Structure of Social Action"* に拠っていたが，彼の理論の構成を明確に摑むに乏しく，それ以後の諸論文集 *"Essays in Sociological Theory Pure and Applied"* に拠ってやゝ輪廓を摑んでみた。ところがその後 10 月半ばに至って *"The Social System"* を入手するに及んで，この方を拠り所とせんとしたが，時日少なくやむなくその一部に中心的拠り所を得た。結果からみれば，彼の "Values, Motives, and Systems of Action" がこの論文の内容になったと云えよう。

2．第一章　行爲の概念

行爲とは，パーソンズによれば「個々の行爲者に対し，或いはそれが集合体の場合にはその成員諸個人に対し，動機付け的意義を有するところの，行爲者＝状況体系に於ける過程（a process in the actor-situation system）[1] である。

即ち，第一に，行爲は行爲者個人に関わる。たとえ集団的な行爲であっても，結局は行爲者個人に帰着する。第二に，行爲は行爲者個人にとって動機付け的意義を有するものでなければならない。たとえ他の諸條件を如何程具備しても動機付け的意義を欠如するものは行爲たりえない。第三に，行爲は行爲者＝状況体系に於けるものである。即ち，孤立的に行爲者個人限りのものであるのではなく，関連的に状況をも考慮するものである。第四に，それは過程である。即ち，静的，無時間的なものではなく，動的な時間的なものであり，何等かの変化的な様相である。以下，右の諸点に就いて順次考察を進めたい。

第一節　行　爲　者

行爲者は具体的個人が行爲体系の理論に関連して現われるものである。従って行爲者なる概念はある意味で抽象概念（abstraction）であるが，その内容的に相応するものとして，実体的なしかも生きている有機体（a living organism）を擁している[2]。彼は云う。「行爲者は丁度知識概念に対する認知する主題の想定の関係と同じように，行爲の概念にとって根本的なものである。行爲は一人或いはそれ以上の行爲者の一連の動作（a series of acts of one or more actors）であり，こゝでは自己・自我などと云う非常に難解な哲学的問題に包攝されることを必要としない」[3]。内容的には「行爲者とはすべての社会体系の単位を構成するものであり，それは目標の達成へと努力し，諸対象・諸事物へ情緒的，感情的に反応し，そして多かれ少なかれ自己の状況，目標及び自己自身を認識的に知り理解していると云う基礎的性格を有する実体（entity）である」[4]。

以上パーソンズによって我々は，行爲者は行爲の中にのみその具現を許されていることを一応知る。従ってこゝから次の如き推論が導き出されてくるであろう。即ち行爲者たることの特殊な本質は行爲過程の中にしかありえない。行爲せざる間は行爲者たるの資格乃至可能性を備えてはいるが行爲者ではない。それは潜在的な行爲者であり，行爲者は行爲の中でしか顕在的でありえない，と。

我々はこの推論に対して二つの理由によって首肯し難いと考える。第一は，行爲をその外面的行動の領域にのみ限るが故にこのような判断が導き出されるのであって，之に対して我々は，行爲はその外面的作用としての行動に於ても内面的作用を常に伴っているものであると考える。行爲として前者を欠如する後者はありうるが後者を欠如する前者はありえない。即ち我々は行爲の内面的作用と外面的作用との両者の関係地位は並列ではなく，むしろ基礎形態と発展形態との関係であるとみるものである。従って我々は後者，即ち行爲の

内面的作用を行爲の本質的な成分と考えるのであり，そして更に之を徹底させて，行爲の内面的作用のみを以てしても行爲であるとする見解をとるものである。

さればこそパーソンズも，行爲者は彼が状況の種々の対象に関して「期待」の体系（a *system* of “expectations”）を展開することをも含むものとしており，その成果を享受するのも又人間の精神と肉体に他ならないが故である[5]。

我々は行爲者概念が時間的様相であり乍らその真意に於て恒常的様相に帰着することを，以上考察してきたが，更に次の問題が提起される。

パーソンズは彼の初期の大著『社会的行爲の構造』（*The Structure of Social Action*, 1937）に於て云っている。「生物学者や行動主義心理学者が人間を研究するときは，それは有機体即ち世界に於て空間的に区別しうる分離した単位としてみる。しかし我々が行爲者として考える関連の単位は，有機体ではなくて「自我」とか「自己」[6]である。」この考察の主要な重要性は，行爲者の身体は行爲にとっては「外的環境」と同じように行爲の状況の部分を形成するとみることである。「彼の行爲が従属する條件の中には，これらの彼自身の身体に対する関係があり，他方彼の意のまゝになる最も重要な手段の中には，彼自身の身体の「力」，それから勿論「精神」とがある。行爲者と状況との間の分析的区別は，有機体と環境との間の生物学における区別と同一視することはできない。それは具体的事物の区別の問題ではなくて，むしろ経験的に有用な理論体系の範疇によって与えられた分析の事柄である」と[7]。即ちこゝで我々は，行爲者の身体までもが行爲者の状況に含まれることによって，行爲者とは領域的にも限定された概念であることを知る。我々は前に行爲者概念の時間的様相を問題としたが，こゝに於てその空間的様相の問題に逢着するに至った。

しかし乍ら我々は，行爲者の身体がその特殊性を無視されて，他の一般的状況と同一視されることには聊か疑問なしとせざるをえない。もし行爲者をかように限定するならば，人格的個人としての主体は，身体を状況要素として除くことにより心理的なものへと還元されて，遂にはその全的完結的存在は無視されてしまうであろう。之は明らかに実在態たる行爲者の性格に反するものである。そこに於ては行爲者の身体は行爲者の属性であり，これによってこそ行爲者は，その時間的空間的な実在性を附与される。尤も身体的條件は行爲者にとって一応ある意味で制約となってはいるが単なる外部的な状況と一色に塗りつぶされてしまうものではない。能力的な制約乃至限界は身体にも劣らず精神に於ても存するものであり，この点を以て身体を精神から論理的に分離して，状況に位置せしめることはその意義に乏しい。むしろ行爲者の身体はその精神と共に，行爲の発動者であると共に，その成果の享受者であり，この意味で身体は行爲者の領域内に包含され，その外在的状況とは明確な一線を画するものである。

さればこそパーソンズは後にはこの考えを修正し，「行爲者の観点からする行爲の研究[8]は，その最も要素的な形態に於ては行爲的関連基構（the action frame of reference）[9]にとって本質的なものではない。」[10]と云っている。又「有機体の行動」と云わず「行爲者の行爲」と云い，環境と云わず「行爲者の状況」と云うのは，彼にとっては単に生物学的，心理＝化学的な有機体の体系との混同を防がんがために他ならないのである[11]。こゝに於ては行爲者の空間的領域は身体と一致する。そして更に彼は生物学的有機体に対して，却って境界保持体系（boundary-maintaining system）としての積極的意義を与えている。それは行爲者に対して常態性（constancies）を附与するものであり，そして境界保持体系の解消や環境との同化，或いは他の型象への変型はその常態性の存在を失うものである[12]。

我々は行爲者を，その物質的行爲能力を具備する身体と，行爲始原性を有する自意識的な精神と

を，論理的方法による以外には不可分な空間時間的同一存在として，経験的に実在するところの行爲主体であると考える。そして就中その中心的地位を占めるものは自意識性であり，行爲者を単的に一言を以て覆えば「人間」に他ならない。

行爲の主体たる人間とは，換言すれば具体的実在的には社会的人間に他ならない。こゝに於て我々は人間（即ち社会的人間）の意味に対し二方面からの陥り易い謬見に対処しなければならない。即ち一つは形而上学的な人間観念と，他は分析的な生物学及び心理学からの人間観念である。そして共に抽象的な人間のみが齎らされることに於ては同然である。第一に形而上学的人間観念は，それが全体的認識を企図せる所産であるが故に実在的人間と同視されやすい。しかし乍らそれは経験的科学的方法によらざる観念論的認識の所産であるが故に実在的人間についての正当な見解たりえない。第一にそれは実在的人間の関連的社会的様相を考慮することに乏しい。第二にそれは人間の身体的制約，従って時間的空間的制約を軽視しがちである。第三にそれは人間の歴史的具体性，即ち個別的様相を顧りみない傾向がある。要するに形而上学的人間は観念的な具体性の乏しい人間に他ならない。これに対して第二に心理学的乃至生物学的人間は，一応身体を具備し，思考し，行動する人間である。しかしそれは形而上学的人間とは反対に全体的認識の上に立ったものではない。それは実験室の中で組み立てられた人間であり，画一的な部分品で構成された人間であって，必要によっては何度でも同じ経過を辿らせえる人間である。この点でそれは非歴史的な，全体的な時間関連が欠如した人間である。それは形而上学的人間と比較して，一応形而下的身体を具備してはいるが，自然科学的な法則のもとでの決定論的な人間であり，従って社会的環境から孤立した人間である。

我々は社会的人間に於て，肉体を有する生物学的人間，思考する心理学的人間も，共に要素的な段階で包容されているのをみる。そして更にそこに於ては，生物学的，心理学的人間が行爲的人間としての媒介を経て，社会的，関連的な人間にまで高められているのをみる。又他方，形而上学的人間に於て企てられた全体的領域が，却ってこゝに於て実現されているのをみる。そこでは行爲はとりもなおさず社会的行爲であり，社会的とは関連的な様相を包含しているものに他ならない。

この場合生物進化の考えを遡及させて，人間は始原的に社会的存在であるか否か一応疑問とされるであろう。しかし乍ら我々は敢えてこの発生学的な問題を考慮に入れても，人間は始原的に関連的即ち社会的存在であると考える。

第一に，人間が一人出生するには生物学的に両性の存在と彼等の生殖行爲とを前提的に必要とする。この事実はその両性各々の出生のための，又その上の両性の存在を必要とすることを意味しており，そこに既に人間の集団乃至社会の存在を前提条件としていることを示す。第二に人間が成長するためにはその初期に於て親乃至その代替者の養育保護を必要とする。こゝに最も要素的な社会たる家族の存在を予想しうる。そしてこの保育期間は単に死亡することなく生物的成長を可能ならしめると云う意味のみならず，進んで社会的訓練を彼に習得せしめる重要な期間でもあると云うことを意味している。第三に更に発生学上始原的に遡って如何と云う問題が提出される。我々は之に対し，人間が社会を作ったのではなく社会こそが人間を作ったのであると云いたい。而して文化が社会を作ったのではなく社会が文化を作ったと云いたい。即ちこゝでの社会とは行爲乃至行動主体の関連的交渉を意味する。逆に云えば社会形成以前の人間は人間ではなかった。人間は相互的な関連的な交渉に於て人間たることを可能とされる。我々は人間以外の動物に於ても集団生活を営んでいる者があることを知っている。之は擬制的に動物社会と呼ばれている。人間は勿論のこと他にも集団生活を営む動物が存在するという事実は，人間が集団生活を作ったのではなくて，集団生活が

人間を作ったことを示すものである。尤もこゝで述べているのは始原的な意味でのものであって，今日通常に意味する文化を包含する社会ではないことは云うまでもない。又人間たることにとって関連的交渉が唯一の條件であったと云うのではなく，不可欠の一條件であったと云うことである[13]。

要するに我々が行爲主体たる行爲者に於て重要な特性とするのは，それが生きている人間であると云うこと，社会的関連の下に立つ人間であると云うことの二点である。

以上我々は，パーソンズの行爲の定義の中で行爲者の概念について検討してきた。なおそこには集団的行爲に於ける場合，行爲者に相当するのはその成員各個人であると云っている。之は結局，行爲の始原的エネルギーの供給者たる各個人が又その行爲結果の窮極の享受者であることに由来するものに他ならない。

第二節　動　　機

次に我々は動機及び動機化についての考察に移りたい。動機（motive）とは意識所有体に於て，行爲遂行の努力へと導かしめるための精神的及び肉体的エネルギーの発動を促がすところの，主観的な意味を附与された，それが外在的要素から構成されている場合はそれが内面的に主観化された，起動的原因である。動機付け又は動機化（motivation）とは，ある主体における変化過程に前提的に動機を附与するところの過程である。換言すれば，意味的要素をして動機へと構成せしめるところの過程であり，云わばあらゆる素材対象は動機化の関門を通って動機へとなる。かくして動機の具体的内容は多種多様に亘るが，動機である点に於て同じである。

パーソンズは云う「人々は自己の行爲を，主観的動機に帰することは事実である。もし彼等がなぜ或ることを爲しているかを問われたならば，彼等はある「動機」（motive）に関連させて答えるであろう」と[14]。人は動機的意味を自己の行動に附与することによって，たとえその程度の差があるにせよ，行爲の最初から意味的内容が附与されるのである。かくて人間は行爲に対して主観的な自己の原因を有する。たとえ客観的には外在的な原因であっても，一旦主観的な自己内面化の媒介過程を経てから主体の行爲原因となる。行爲主体がかように意識することによって，その行爲の過程及び結果に対して責任を自覺し又享受の権利を持つ。何故ならば人間は自意識的に意志を以て自己の行爲を始め，又は少なくとも始めたと観念しているからである。人間の挙動（Verhalten）に対し行爲者が主観的意味（subjektive Sinn）を附与している場合に行爲（Handeln）であるとする，かの有名なマックス・ウェーバーの行爲の定義[15]もこの動機化的意義に行爲特質の焦点を求めたものに他ならない。

たゞ問題は，動機化の時期は行爲の前提として行爲以前に於て原理的に存するものであるが，それが行爲の進行の初期に於て，或いは途上乃至それ以後に於て行われることもありうると云うことである。かような場合は行爲が急進的に要請されて充分な動機形成の余裕を与えず，事後的に充分な形成へと導く場合である。このことは自ら積極的に企てたというよりも，受動的に所謂受けて立ったという場合が一般的である。しかし乍らその場合に於ても動機は前提的に皆無なものではなく，ただ明白に自覺的な責任的なものに形成され終る時期が行爲中に延長される現象である。又之と類似の現象がみられるのは未完成な人格に於てであるが，之は過渡期的な現象に他ならない。そこでは充分に反省的な行爲自覺に乏しい。

更に一言すべきは，擬制的な動機が動物に於て存することである。しかし乍らそれは動物自身にとっては衝動的な意味しか持たず，それは外部的観察者たる人間にとってのみ見せかけ的に動機付けることが可能であるにすぎない。従ってそこには人間に於ける如く，主体に於ける自覺と責任は何等存しえない。自己の行動に対しそれが客観的

に妥当であるか否かは別として，自ら動機を附与するのは，即ち行動の最初から主観的に意味を附与しうるのは人間だけである。従って自意識性は人間たるの行爲にとってのみのものである[16]。我々はパーソンズの行爲の定義に於て，この動機化的意義と云う條件に於て，初めて動物一般の行動から人間行動の段階たる行爲が独自に区別されうることを知る。行爲が動機を含むことは，即ち行爲者にとって動機化的意義を有するものであることは，行爲に意味を附与し之を生きたものとすると云う点で，枢要的な云わば画龍点睛的な意義を有するものである。

行爲が人間にのみ独自のものであると云うことは，生物一般の行動諸要素を否定し去った上に行爲がおかれていると云うことを意味しない。むしろ生物一般の行動様式の上に附加的に人間の行爲が存在を可能ならしめられている。即ち趨向的行動（Tropism），漫発的行動（Random Movement），反射的行動（Reflex Action），本能的行動（Instinctive Behavior）[17] 等の上に自意識行動，即ち行爲が人間的なものとして附与されている。人間に於ては生物一般の行動形式が消滅してしまっているとは考えられない。むしろ一見そのようにみえるのは，それを抑制乃至昇華しているのであると考えるのが至当である。或いはそれらは更に変改乃至限定されている場合もあろうが，とにかく痕跡的ともせよ残存しているものである。又所謂二次本能[18] と云われる生殖本能はもとより一次本能と云われる飢，渇，消化，呼吸，血液循環等生理的な関連を持つものでさえも，すべて社会的な関連の下で（文化的に）意味付けられていることはマリノフスキ等の云うところである[19]。そして何よりも人間にとって全的な本能への対抗たる自殺行爲が可能であることによっても，人間の知的，意志的な力によって本能に対して高度の弾力性が与えられていることを知る。

最後に我々が動機化様相に於て最も重視すべきことは，動機の形成についても，その行爲化の過程に於ても，ひとしく人間の社会関連的様相が貫かれていることである。従って我々が動機を心理学的段階にまで分析して考察することは，有効な成果を期待し難いばかりでなく，却ってその本質的な核心と全体的な関連を見失う懼れがある。

パーソンズは云う。「社会学的に関連せる形態に於ては，「動機化」は人格の段階で組織されたものとしてやってくる。」又行爲諸過程のエネルギーや「努力」要因（“effort” factor）の窮極の渕源は有機体から派生される。従って又，ある意味に於てすべての満足と損失とは有機体的意義を有する。しかし根源は有機体の得失に根ざすものではあるが，動機化の具体的組織は行爲理論にとっては，有機体の有機的欲求に於ては分析されえない。この行爲要素の組織は行爲の理論にとっては，就く行爲者の彼の状況に対する関係の機能であり，その関係の，即ちこの意味に於ては「経験」の，歴史である。」[20] しかし乍ら必要の限度に応じてある條件のもとに，心理学その他の可能な理論を動員することを妨げるものではない[21]。

第三節　行爲者＝状況体系

行爲の第三の特性はそれが行爲者＝状況体系（actor-situation system）に於けるものであることである。我々はこゝで明確に行爲は関連的なものであることを知る。従って行爲は心理学的なものに還元されては理解しえないことは既に触れたところである。パーソンズによれば行爲者の状況とは丁度生物有機体の環境に当たるものである[22]。状況とは相対的，関連的なものである。ある事物状態が状況となるのは，それらが論理的に抽象化されることが必要であり，従ってそこには必然的に主体の存在を前提としなければならない。即ち単なる状況は存せず何にとっての状況であるかが理解の必要條件となっている。従って主体の性格によって状況の範疇が論理的に規定されることとなる。そしてこの場合には，経験的実在たる行爲者が主体であることが知られているが故に，その

状況も経験的実在に他ならないことを知る。しかも行爲者にとっての状況は，規定の原点が行爲者であるが故に，行爲者にとって何らかの意味内容を程度の差こそあれ例外なく有している。従ってそれは最早単なる自然環境ではなく，何らかの意味的な分類が可能となる。

パーソンズは云う。「状況とは定位の諸対象（objects of orientation）から成るものとして規定される。それ故ある行爲者の定位は彼の状況が組織されるところの異った諸対象と，それらの等級とに関連して区別される。行爲の條件に於ては対象世界を，社会的，物質的及び文化的の三等級の対象から組成されるものとして分類するのが便利である。」[23] そして社会的対象は，他の行爲者，自己又は集合体（こゝでは定位の分析のための単位として）であり，物質的対象とは，行爲者と相互作用や反応をせず行爲の手段と條件とのみになる経験的実体であり，文化的対象とは，自我によって状況的対象として扱われ，彼の人格構造の構成要素として「内面化」（“internalized”）されないところの文化的伝統の象徴的要素である。

次に状況はその主体との間に相対的，関連的な関係の存する故に，こゝに一つの体系を構成することが可能とされる。それは始原的には論理的な体系が現実的な主体＝状況対象の関係に投影されて，経験的に成立したものである。パーソンズは体系の性格を次の如く考えている。「かゝる体系は経験的関連と論理的に相互依存にたつ一般化的概念の一体を成すものであり，理念的には論理的に完結したものとなり，かくして体系内の諸命題の如何なる結合も，そのあらゆる論理的内包が同一体系内のある他の命題に於て明確に述べられると云う論理的結合の状態に達せんとする傾向を有するものである。」[24]

彼は又『社会的行爲の構造』に於て体系の概念について述べている。「行爲の状況の諸事実に関する限り「体系」の語は明確にされるべき二つの異った意味に於て用いられてきた。一方では，それは論理的に相互関連された諸命題の一体，即ち「理論的体系」に関連し，他方，経験的に相互関連された諸現象の一体，即ち経験的体系に関連する。前者は全くの「現実的」体系でないのみならず，通常の意味では如何なる事実をも述べない。それは単に経験的諸現象の一般的特質を規定し，それらの諸価値の間の一般的関係を述べるだけである。理論的体系を経験的諸現象に適用するに際しては，通常諸事実と呼ばれる資料が供給されねばならない。これらの資料は理論の体系を作りあげるところの一般的諸範疇の特殊な「諸価値」を構成する。勿論，一又はそれ以上の変数（variables）の経験的に与えられた諸価値が既知ならば，他の諸事実は理論の適用によって同じ経験的体系については求められうる。理論体系が抽象的である限り，その経験的体系への適用にとって必要な諸資料は二種となる。即ち，自然科学で云うところの変数と常数との値である。一つの理論体系にとって常数であるものは，勿論他の体系の変数を構成する。かくて行爲体系においては行爲者の状況の事実は，それらが行爲から分析的に独立的である限り，常数である。」[25]

しかし乍ら，経験的体系はそれが体系である限りは，それを理解する人間にとって何らかの理論的体系となることを要請される。逆に理論的体系は，それが科学的方法の所産であって形而上学的認識の所産でない限り，経験に反するものではなくむしろ経験の所産である。そして科学が経験的方法の学である限り，それは経験的事実の投影である。従ってこゝで云う行爲者＝状況体系は我々にとって経験的且つ論理的，即ち一言を以て覆えば科学的であることを要請されてくるものに他ならない。さればパーソンズも『社会体系論』（*The Social System*, 1951）の巻頭に於て，その著の主題が概念体系の構成にあることを述べつゝも，その価値は窮極的には経験的調査における有効性に於て検証されることをみとめている[26]。

行爲者＝状況体系は行爲者の位置に関わるもの

であり，従って相対的なものである。社会的状況に於ては，行爲者は複数的に存在するが故に，行爲者＝状況体系は多数複合的に錯綜したものとして実在する。従って必然的に行爲は関連的なものであることが結論される。行爲は社会的に関連的なものであるが故に，之を孤立的に理解することは現実を具体的に把握したものとは云えない。従って前にも述べた如く，之を心理学的に還元して考察することは行爲の具体性を示しえず，同様に心理学的な方法を全的に社会的関連にまで拡大した方法も，前者の非社会的性格を踏襲するが故に妥当な社会的行爲理解の方法ではない。要するに行爲者＝状況体系には，観点として行爲者が存し，従って行爲者＝状況体系はその行爲者にとっての状況的事実の意味となってくる。かくて状況の分析は，行爲それ自身の分析によって充分に統合されねばならない[27]。

我々はこの第三の條件によって，行爲が云わば「場」としての空間性を与えられ，しかも社会的関連的なものであることを内容的に明確ならしめられていることを知る。

第四節　過　　程

「過程」とはパーソンズによれば「その中に於て体系の，或いは体系の部分のある状態（a given state）が他の一状態（another state）へと変化するところの何らかの方式乃至様式である」[28]。即ち過程は同一体系内の状態の時間的連続性に於ける変化様式である。もし論理的に，過程を無限に時間的に截断するならば，微細な相違を伴った各状態が截断した数だけ析出されるであろう。即ち過程は，従って行爲は時間的な変移をその中に包含する。たゞ過程は，変動と異って同一体系内における変化であり，そこでは共通の基盤の存在により同一の論理的尺度によって測定されうるものであることを知る。かように過程は無制限な無規定的なものではなく，一定の関連基構（frame of reference）を有していると云える。

しかしこゝに問題が提起される。即ち行爲を狭義に行爲者の外郭的な動作のみを示すものとし，内面的な作用たる所謂態度乃至傾向は過程に非ざるものとして，之を包含せしめないとする見解である。しかし乍らこの見解は，人間の意志的，知的，感情的な行爲を機械的な動作と同一視する欠陥におちいるものと云わざるをえない。態度をとることは，対象に対する主体の何らかの意味的な定位である。それが対象に於て影響や変化が認められるか否かは別として，とにかく従前まで意識の対象でなかったことが意識の座に据えられると云う点に於て，主体に於ける内面的な状態の変化であると云うことができる。そしてそれは往々にして外部的に何らかの表情として現れさえする。従って行爲の内面的作用たる態度が外面的に発展したものが，含意的な表情，動作に他ならない。即ち両者は前述の如く，連続的な，基礎形態と発展形態との関係にたつものであり，従って共に両者を行爲の名称を以て覆うことを妥当と考える。

次にしからば，行爲の中に態度も包含されるならば，態度をとった後の経過的持続的であるところの態度は果して過程であるか否かという問題が提起されるであろう。勿論態度が持続的な状態であり，従って時間的経過をその属性としていることに就いては何人も承認するところであろう。従って残された問題は態度が状態の変化であるか否かと云う点である。この際認識論的な，同一事物の時間的持続性を時間の層で截って，之を時間的に別個の事物となす見解は論外とすることは云うまでもない。我々はこゝに弁証法の量より質への転化の論理を採用して述べることを許されるならば，それは容器に水が刻々増して遂に溢れ出すことと同様であると云いたい。我々がそこで認めうるのは毎秒一定量の水が水差しから持続的に注入されていたことと，ある時間の経過後水が縁から溢れ出たことだけである。そして容器中を覗くことを許されないが故に，刻々容器中の水面が上昇していたこと，従って水量が増していたことを認め得

ないだけのことにすぎない。我々は態度に於ても主体の対象に対する一定の定位が，程度の差こそあれ持続されていると云うことは，時間的経過，即ち上の比喩に従えば時間的蓄積に他ならないことを知る。こゝには経験と記憶の作用が働いて，経過を蓄積たらしむることを可能にしている。人間はある感情を意志を抑えて平静を粧っても，それが過度に強烈であるとか持続的である場合には遂には抑制しきれなくなるであろう。我々はこゝに，経過的な心的態度は内面的には蓄積的であり，それがなおも経過するならばやがては外面的に顕現されるであろうと考える。何となれば一つの態度をとると云うことは人間にとって何らかの意味で負担に他ならないからである。この場合之に対抗する他の傾向乃至態度を以て均衡をはかることも考えられるが，両要素の均衡の時間的経過をも量的蓄積的に理解するならば，之も両者の均衡の強度即ち緊張を増すのみであり，主体にとっての負担であることに変りはない。又，態度が一時的なものであって持続的でない場合は如何の問題は容易に説明されうるであろう。即ち第一にどんなに一時的な態度であっても時間的な延長性を有するであろうし，第二に前述の如く発生的に考えても，態度をとると云うことは過程に他ならない。人間は対象を意識している限り，何らかの態度乃至傾向を潜在意識的にせよ執っているものである。無視することも反対的態度の一表現であり，逆説的には態度である。

以上考察してきた如く，我々はパーソンズの行爲概念を一応妥当と認めるものである。即ち，行爲は主体を有し，主体に対して始原的に意味付け的なものであり，一定の社会関連的な背景を有し，時間的経過と実質的な変化を有するものである。而して行爲を行動以上の廣義なものと解し，云わば心が何を考え，そしてそれに対して心が如何なる態度をとっているかが根本的に重要であると考える。従ってパーソンズもその行爲理論を展開して社会体系（social system）を述べるに当たって，五組の基礎的な撰択の型を設定し，之に重要な意義を附与している[29]。

しかし乍ら，行爲は主体の行爲であり，何事かについての行爲である。このことは行爲の考察に於て一層重要である。行爲の全的な考察もこの段階に於て可能である。何となれば行爲概念は状態概念であって，之を具体的な現実的な様態に於て考察するには当然行爲の内容が包含されなければならないからである。この点パーソンズの行爲的関連基構の前提的な設定を過度に絶対視する弊に陥ってはならないと考える。

註

1） Talcott Parsons, *The Social System*, 1951, p. 4.

2） T. Parsons, *The Structure of Social Action*, 1937, pp. 83−84.

3） Ibid., p. 745.

4） Parsons, *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, 1949, p. 32.

5） Parsons, *The Social System*, p. 5.

6） ここで云う「自己」「自我」とは哲学的意味に於けるものではなく経験的な意味に於けるものである。

7） Parsons, *The Structure of Social Action*, pp. 46−47.

8） Ibid., p. 46.

9） 行爲的関連基構はaction frame of referenceの訳語であるが，聊か生硬の感を免れ難いことは自身の最もよく知るところである。しかし乍ら未だ適当なる訳語に遭遇したことがなく，恐らく邦語文献に於ては定訳がないのであろう。frame of referenceはもともと数学の用語で準拠標のことであるが，之は所謂XY両軸の直交する基本的な座標の更に一般的な形態に於てとらえたものである。その企図するところは互に独立的な別個の存在事象を関連化することにある。しかし乍ら社会科学に於て用いる場合はそれが発生的に相互の間に内的な構造関連が前提的に存するからこそ可能であると云わねばならない。従って行爲を以てする関連基構は始原的に別個の孤立的存在が行爲によって初めて結びつけられたものではなく，最初から内的に行爲を以て関連付けられつつ別個に派生したからこそ，行爲によって関連付けうるのは当然であると云うべきである。この語の難点

は「機構」と同音なことである。

10）Parsons, *The Social System*, p. 543.

11）ditto.

12）Ibid., pp. 482, 543.

13）人間が人間たりえたのは，この集団生活，群居生活と云う外的な條件と相俟って内的な知能の発達があったからこそ人間になりえたのである。人間に生物学的に最も近いと云われるチンパンジーが集団群居の生活をしないことは却ってこのことを裏付けるように思われる。もし進化論的表現を借りるならば，彼等チンパンジーは人間に進化しうる程の知能を有していたにもかかわらず，たゞ一つ集団的な群居生活をすると云う條件に欠けていたために人間になれなかったのであり，彼等と同程度の知能の動物が集団生活をしていたからこそ，社会生活を通して人間になりえたのであると考えることができよう。

14）Parsons, *The Structure of Social Action*, p. 26.

15）Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1921, Parsons, *The Structure of Social Action*, pp. 640−641.

16）新明正道著『社会本質論』1942 年，106 頁。

17）同上書及び新明正道編著『社会学辞典』1944 年，103 頁。

18）南博著『社会心理学』1949 年，53 頁。

19）B. Malinowski, *A Scientific Theory of Culture and Other Essays*, 1944, pp. 89, 138.

20）Parsons, *The Social System*, p. 9, p. 5.

21）ditto.

22）Parsons, *The Social System*, p. 543, および "The Prospects of Sociological Theory", *American Sociological Review*, vol. 15 no. 1, 1950, Feb, p. 9. この論文は彼の *Essays*, 1949 以後のものであり，従ってそれには収められていないが，かなり問題的，示唆的な論文で，彼の *Toward a General Theory of Action*, 1951 中の E. Shils との共同論文や *The Social System*, 1951 等にみられる彼の新しい修正された思想への転機を有するものである。

23）Parsons, *The Social System*, p. 4.

24）Parsons, *Essays*, 1949, p. 17.

25）Parsons, *The Structure of Social Action*, p. 71.

26）Parsons, *The Social System*, p. 3.

27）Parsons, *Essays*, 1949, p. 6.

28）Parsons, *The Social System*, p. 201.

29）Parsons, *The Social System*, p. 46. および "The Prospects of Sociological Theory" *A.S.R.*, 1950, vol. 15, no. 1, p. 10.

補註 1

Action の語を行爲と訳すか行動と記すかも異議のあるところであるが行爲とした。その理由はパーソンズが別に行動に当たる behavior の語を使用しているが，所謂行爲に当たると云われる conduct の語は用いていない。behavior は行動主義（Behaviorism）に於てみられるように外形的な動作のみを意味する弊があり，conduct は倫理的，規範的な意味がともすれば含まれ，経験的，社会的な人間行爲を充分に表現しないからであろう。

高田保馬博士は action を意味するに作用の語を以て，「目的または性向が意識し反省せらるると否とに拘らず，一定の方向を内に含みつゝ営まるるはたらきの意味に於て取扱ひたいと思ふ対象をよく示す」が故を以て正当とされつゝも，学界の慣習に従って行動の語によって表現するとされている（高田保馬著『社会科学通論』1950 年，178 頁）。たしかに一応，博士の云わるゝ如く作用の語はその長所をもっているが，他面作用の語は広く物理的現象をも示すのに用いられて，人間の行爲現象を示すに乏しい欠点が存する。

又，武田良三氏は action を述べるに行動の語を以てしているが，同様の短所を有しており，M. ウェーバーの行爲概念を説明するのに括弧を以てしている（武田良三著『社会学の構造』1952 年，102 頁）。行動の語は生物一般の行動を示すに便利ではあるが，特に人間の行爲をその内面的作用をも含めて示すに乏しい。

補註 2

Orientation は一般に志向（付け）と訳されているようであるが，志向の語は別に，intention を云うに適当であると考える。Orientation は，intention が主意的乃至主観的な対象に対する方向付けであって，その含まれる状況乃至他の事象との関連性を示すに乏しいのに対して，広く状況への関連の下に於ける対象への方向付けを示していると考えられる。何れも自然科学の理論で云うベクトル（vector）の如く方向性を含んでいる。そして方向性を有することは対象へ向って行動をおこすことの可能性を前提的に含んでいると考えられる。

補註 3

一般的に事象の動的現象をみるならば，そこには二種の形態がみられる。例えるならば，機械の運転の如く反復的，循環的現象と，船や車の移動の如く外方向的な一回的な現象とである。之を社会的現象に於てみれば，前者は社会過程に，後者は社会変動に妥当せしめうる。我々は人間の行爲に於ても，前者をその内面的作用に，後者をその外面的作用に妥当せしめうると考える。而して機械に於ける運転が全体としては一つの機能過程ではあるがその部品のあるものについてみれば一つの外方向的運動であると云える。しかも機械は全体に於ても空間的にこそ運動はしていないが，論理的にはある未来の状態へ向っての外方向的運動でもあると云える。例えば製品の生産蓄積の如く。ある意味で，この過程的なものと運動的なものとの差は，たゞその枠の設定が総体的であるか部分的であるかによるとも考えられる。我々はこの機能的過程的なものと，運動的移動的なものとは，意味的に一貫して考えることも可能であると考える。之を図式的に仮に示せば，螺線状であると考える。そこでは反復的過程的なものが同時に発展的なものへと構造的に関連付けられている。丁度機関の運転がスクリューの回転を通じて船を進行させるように。

3．第二章　行爲の定位様式

第一節　動機化的定位様式

我々は前章に於て行爲の考察を一応定義に於てみたのであるが，そこに於て行爲が外面的作用よりも内面的作用に於て重要な意義を有するものであると考えた。人間は意識の視野におかれた対象に対して自発的に何らかの評価判断をする。その意味附与に従って人間は行爲をする。換言すれば人間は行爲する際に何らかの状況的な判断をなす。即ち之の動機と共に行爲の前提的な位置を占めるものである。行爲者に於てある欲求が存し，之が満足を実現しようとする場合，その状況との関連と，その実行の可能性の検討，更には到達しようと望む未来の状態の予測等が，行爲者の考量するところであり，ここに種々の動機化的定位が行われて行爲化されることとなる。

この種々の動機化的定位をパーソンズは三つに分類している[1)]。

・認識的定位　cognitive orientation
・関心占有的定位（或いは単に占有的定位）
　cathectic orientation
・評価的定位　evaluative orientation

認識的定位とは行爲者の関心（interests）に対する関係に於ける，状況の関連的諸様相の規定を意味する。関心占有的定位とは人格の満足＝損失の均衡（the gratification-deprivation balance）の問題における，自我の対象に対する関係の意義である。評価的定位とは行爲が「体系統合」（system integration）へと組織されるために，多くの定位の可能性の中から二者択一的に秩序的撰択（ordered selection）が行われる過程である。

最も一般的な意味に於て，個々の行爲者は欲求傾向体系（need-disposition system）に於て二つの最も始層的，要素的な様相を有する。即ち「定位的」様相（“orientational” aspect）と「満足的」様相（“gratificational” aspect）とである。前者は彼の対象的世界との関係の「方法」（the “how”），即ちそこに於て彼の対象世界との関係が組織されるところの形式乃至方式に関わるものであり，後者は行爲者の対象世界との交換の「内容」（the “content” of his interchange），即ち彼が対象世界との相互行爲から「何を」得るか，又対象世界の彼に対する「出費」（“costs”）は何であるか，と云うことに関わる。而してこの二つの行爲者の欲求傾列体系の様相を単に孤立的にではなく，もっと関係的様相の強調に於て考察するならば，前者は夫々前述の認識的定位（cognitive orientation）と関心占有的定位（cathectic orientation）へと展開する。そしてこの両様相は共に行爲体系の単位，即ち単位作用（unit act）[2)] と考えられるものに含有されていなければならない。

認識的定位は以前に E. トールマン（Edward C. Tolman）の手段的学習の研究[3)] に於て認識的位置

図示（cognitive mapping）として用いられた概念であると云う。関心占有的定位のcathectic, cathexisの概念は精神分析学に於て用いられている概念で，ドイツ語のbesetzt, Besetzungの英訳語である。之は元来フロイトに於て初めて用いられた概念であって，心的な構造乃至過程に於て抱懐され，或いは附着せる心理的エネルギーの観念を表わすものであって，云わば電池の充電現象にもたとえられるものである[4]。パーソンズは人間が行爲をなすに当たってその心理的構造乃至過程を占有するものは，自己に関しての内容的，従って利害関係的な意図乃至関心に他ならないが故に，フロイトのBesetung（cathexis）の概念を援用して，それに実質的な意味を附与せしめつつ，即ち単に占有することだけでなくどのようにして占有するかの意を含めて，関心占有的定位の概念を設定したものである。

認識的定位と占有的定位とを比較するならば，前者は外部的な関連的な局面に関しての，云わば外面的形勢に関しての定位の仕方であり，後者は之に対して内部的，実質的な局面に関しての，云わば具体的内容に関しての定位の仕方であると云えよう。しかし両者は共に行爲者中心的な観点であり，そこでは状況は依然として比較的に従属的な地位を占めるものである。この点両者は行爲体系に於ける単位的様相たる単位作用にかゝわる次第である。

しかし乍ら単位作用或いは単位行爲は，単独的，孤立的におこるものではなく，多くの単位作用と共に体系へと組織された状態に於て具体的におこるものである。従って最も要素的な体系段階たる行爲においても体系統合の構成要素たる単位作用を考量しなければならない。行爲的関連基構（the action frame of reference）の，即ち行爲体系を以てする関連のための基本的な枠構造の見地に於ては，この統合は多くの定位の可能性の中から秩序的な撰択をすることに他ならない。従ってその撰択の対象内容をなすものは前述の二定位様式の原理的内容が包含される。即ちそこでは認識的定位の様相では，対象は如何なるものであり如何なることを意味するかについての判断や説明の二者択一を有し，関心占有的定位の原理動力たる満足欲求（gratification needs）はその状況に提出された可能な諸対象を二者択一的に有することとなる。かくしてそのような二者択一操作にあっては秩序的撰択過程が存在しなければならず，それが即ち「評価」（evaluation）に他ならない。かように評価的様相はあらゆる具体的な行爲定位に存するものである。すべての行爲体系の最も要素的な構成成分は行爲者と行爲者の状況とである。而して状況に於けるすべての社会的乃至非社会的諸対象は何らかの程度に於て行爲に関連する。何となればそれらは行爲者に対しあらゆる可能な限りの二者択一の対象のための素材を提供し，又他方行爲者の行爲遂行に関して諸制限を課するものであるからである。従ってこれらの諸対象をめぐっての行爲の定位は，行爲者の側にあっては撰択を結果する。かくして秩序的撰択は，第一に諸対象やそれらの諸特性の間の認識的弁別（cognitive discrimination）の，第二に行爲者の欲求傾向を充足させる諸対象の能力に従ってのこれら諸対象への関心占有的な（積極的乃至消極的な）反応の，更に第三に眞理の認識的基準，妥当性の占有的基準及び正当性の道徳的基準に基づく評価的判断の，以上三者の結果として撰択が行われる。すべての行爲は認識的，占有的，評価的の諸様態を含んでいる。しかしこれらの様態のうちでどの一つがその程度に於て優越するかはその所与状況による。

云うまでもなく行爲は，屡々述べた如く「期待」乃至「態度」をも含めるものであるが，そこには上述の認識的な状況規定，占有的な関心及び評価的撰択の三定位様相の他に，更に時間的様相（time aspect）が存する[5]。期待は時間的様相に於て行爲者＝状況体系の未来への発展と，過去の行爲の記憶とに定位している。即ち状況への定位はその発展的形相に関連して構造付けられている。行爲者

はその発展のある可能性に於て云わば「投資物」（“investment”—関心占有的定位の対象内容を存するもの，即ちフロイトの云う besezt されたもの）を獲得する。それは行爲者にとってある可能性が他の可能性よりも実現されやすいと云うことに関わってくるものである。

パーソンズはかように時間的様相の観念を持って来ているが，之は前述の三定位様相と同列に配することのできない独特の性格を有するものと考えられる。時間は経過的なものである。従って時間はあらゆる事象の中に，即ち最大の実在範疇たる存在の様相を伴うところのすべてに存するものである。時間は云わば他の様相を横断的に類別するものであり，立体的に対置されるものである。パーソンズは『社会的行爲の構造』に於ては行爲の特性に時間を含めているが[6]，時間は過程あり発展あるところに例外なく前提されているものであり，それ故にこそ我々はその事象の説明に於て時間的様相の考慮を特に必要とせざる限り，一々言及を要せぬ程自明のことであると考える。

さればここに於てパーソンズが時間的様相を特にとりあげた理由は，それが論及に当たって特に重要な意味を有するが故に他ならない。即ち，この行爲者の状況の発展に対する関心の時間的次元は，能動性＝受動性の同位対立性（activity-passivity coordinate）に従って区別されるであろう。行爲者は一方の極に於ては単に発展を待ち受けて何事かを爲そうと積極的に試みることをしないであろうし，他の極にあっては積極的に自己の願望関心と一致させて状況を統制するであろう。かくして多数の行爲はこの二極の間を種々の程度において配列される。即ち行爲が時間的経過を爲せば，そこには必ずこの二極間のある地点に位置するよう必然的に展開されるものである。それは丁度性格の空白な人間が考えられえないのと同然である。かくて行爲者が単に受動的，消極的な関心を示すところの行爲者＝状況体系の未来の状態は「予期」（anticipation）と呼ばれ，他方行爲者が，彼が出来（しゅったい）を欲しない出来事の阻止をも含めて，能動的，積極的に斎そうと試みる未来の状態は「目標」（“goal”）と呼ばれる[7]。行爲の目標志向性（the goal directedness）は特に規範的定位（normative orientation）の基礎が論ぜられた場合には，すべての行爲体型の根本的特性をなすものである。しかし乍ら分析的にはこの目標志向性は，期待の概念から一段次の段階にたつ。何となれば受動的に予期的な定位も論理的に可能なものであり，之は目標志向性と反対の立場として共に期待の中に含まれるからである。

パーソンズは『社会的行爲の構造』（*The structure of Social Action*）に於て，行爲の要素的な単位たる作用（act）の論理的内容を四つあげている。第一に「行爲者」（actor），第二に「目的」即ち志向された未来の状態（この点行爲は目的論的である），第三に行爲が出発する「状況」，これは二要素を含む。即ち（1）行爲者が統制しえないところの「條件」（“conditions”），（2）行爲者が統制しうるところの「手段」（“means”）。しかし乍ら実際には部分的に條件，部分的に手段であるのが普通である。第四に以上の諸要素の間にはある関係様式が存する。即ち目的に向っての手段の二者択一的撰択には行爲の「規範的定位」（“normative orientation”）が存する。行爲者の統制の範囲内では，手段は盲目的，盲従的に撰ばれるものではなく，我々の有する知識と云う如き独立的且つ決定的な撰択要因に従って撰ばれるものである[8]。以上四つの構成成分をパーソンズは指摘しているが，この構想はその後の諸論文に於て次第に修正され，「社会学理論の展望」（The Prospects of Sociological Theory, *American Sociological Review*, 1950, Feb.）に於て顕著に，シルズ（E. Shils）との共同執筆論文「行爲の価値，動機及び体系」（Values, Motives, and Systems of Action, *Toward a General Theory of Action*, 1951 に所載）に於て決定的に改められ，単位行爲の中には目標志向（ends or goal directed）が一段その後の段階に含まれるものとして除かれ，行爲はその

内容が更に広汎な要素的なものとなった。そして当然之に随伴して手段（means or instruments）も要素的段階に於て除かれた。手段的様相はかくして行爲が積極的に目標志向した場合にのみ，状況と行爲の状況に対する関係，即ち彼に対し開かれている多くの二者択一とその蓋然的な結果とに関する諸考量を形成する。結局するところ，『社会的行爲の構造』に於ける単位行爲は「行爲の価値，動機及び体系」及び『社会体系論』に於て叙述された単位行爲の一特殊部分に当たるわけである[9)]。

たゞしかし乍ら，単なる「刺戟＝反応」（“stimulus-response”）は上述の行爲とは別のものである。即ち刺戟＝反応は期待の体系を展開することなく，従ってそこでは何ら明白な状況の未来の発展への定位が爲されないからである。刺戟は理論的な分析にかゝわることなく完全に偶発的に襲来する。

第二節　価値定位様式

行爲が期待の体系をも含むことは屢々述べたところであるが，更に之を立ち入ってみる必要がある。即ち，期待は成程一応は行爲者自身の欲求傾向と，彼が企てる行爲の種々の二者択一に隨伴する満足と損失との蓋然性とによってのみ構造付けられるだろう。行爲者とその状況対象との関係に於ては，行爲者からのみの行爲の作用方向を考量することによってその行爲者の期待的行爲を展開するものであるが，現実には之のみでは一面的な考察にすぎないだけである。実際には社会的諸対象との相互行爲の場合には更に新しい次元が加えられる。即ち自我の期待は自我の可能な行爲に対する他我の蓋然的な反応行爲に存すると云うことである。その反応行爲は自我に於て前以て予期されるようになり，かくして自我自身の撰択に影響を与えるようになってくるのである。期待的行爲はこのように行爲者に於て，自己の行爲に対する他者の反応を考慮に加えた上での期待の体系を展開するに至る。従ってこゝに於ては，式は行爲者から他者への作用に，それに対する他者から行爲者への反応作用とが仮設的に経験と想像とによって行爲者自身によって画かれて，しかる後にその考察の結果に基づいて，現実的に行爲者から他者への期待の体系が展開されるのである。

かくして状況の種々の要素が彼の期待の体系の組織に関連してくる。従って状況のいろいろな要素が自我にとって「記号」や「象徴」として特殊な「意味」を持ってくる。特に社会的相互行爲にあっては，記号と象徴が共通の意味を獲得して行爲者間の伝達の手段として役立ってくる。例えば感情及び意志の伝達のための表情，身振，殊に言語等にある共通な約束乃至法則のもとにおかれていることによってその機能を発揮しうる。記号なくしては行爲のすべての定位的様相は無意味である。しかも人間の段階に於ては他の動物と異なり，記号定位（sign-orientation）から眞の象徴化（symbolization）へと進んでくる。即ち具体的事象に固定した意味ではなく，それらから離れた一つの抽象的な普遍観念としての意味を有してくる。このことは文化の出現にとって必要な條件である。動物にあっては状況とその解釈とは反射的に固定的に結びつけられたものである。之に対し人間にあっては撰択的なものとなってくる。即ち状況の諸対象の多くの可能的二者択一から自ら判断して撰択することは，自我にとっては，それが始原的に自らの関知しない所与條件によって制約されているが故に，その場その場に応じての判断によるところのもの，即ち偶然的なものに他ならない。而してそれが社会的相互行爲に於ては，他者の可能的な反応行爲もかなりの領域にまたがるものであり，その領域内での撰択は自我にとっては結局，他者の反応に於ける撰択の偶然性と，自我における撰択の偶然性との，二重に偶然的なものとなる。人間においてこの自我と他我との二重の偶然性を誤りなく連結することを可能としているのは共通の記号や象徴の存在である。即ち真の象徴化は相互行爲の過程に含まれ二重の偶然性（double contingency）の要素に結びつけられている。かくして相

互行爲過程にとって符号の意味は状況の特殊性から抽象されねばならない。即ち符号の意味は広汎な領域の “ifs”（その場その場の可能偶然的諸事例）を通じて安定したものであらねばならない。しかもこの “ifs” は自我の行爲だけでなく他の行爲にも存するものであり，かくして両者の相互関係に於ては両者の “ifs” の可能な順列，組合せであり，“ifs” は二重の偶然性にまたがるものとなる。この点二重の偶然性は二つの円弧の接点にたとえられる。即ち自我のある扇形部分（sector）の接点が他我の如何なる扇形部分の接点に相当するかを知るには，個々の特定の場合から抽象された共通の関連的な座標によって位置付けされていることによってのみ可能である。

最も個別的な状態から意味を抽象する能力なくしては伝達は不可能である。しかし逆に象徴体系の諸個人を通じて時間を越えてひろがっているこの安定性は，それが多数の行爲者の相互行爲における伝達過程に於て機能しない限り恐らく維持されえないだろう。例えば言語は，各人がそれを正当に理解していることが前提となっているものであり，如何に言語が存在しても各人がある単語によって同じものを表象せずしてまちまちに理解しているならば，その機能は否定され，従ってその存在意義も失われる結果となるであろう。即ち象徴体系の安定性はその分有性を必要とし，その存在意義は活用の機能にある。そしてパーソンズによれば，この相互行爲に於て機能する分有された象徴体系が「文化的伝統」（cultural tradition）に他ならない[10]。

上述の分有された象徴体系と行爲の「規範的定位」（“normative orientation”）との間には根本的な関係が存すると考えられる。即ち意味の象徴体系は現実的状況に「賦課された」（“imposed”）秩序の要素に他ならない。最も要素的な伝達でさえも象徴体系の「慣例」（“conventions”）にある程度一致しなければ不可能である。換言すれば期待の相互性は象徴体系の分有された秩序に定位されている。自我の満足が他者の反応行爲に依存してくる限りにおいて條件的基準はいかなる條件が満足する反応行爲を招くか或いは招かないかに従って作りあげられてくるものであり，これらの諸條件と反応行爲との間の関係は，自我の状況に対する定位の意味的体系にとって見逃しえない役割を占めてくる。規範的秩序に対する定位たる，期待と是認との相互的組合せ（mutual interlocking of expectations and sanctions）と云うことは行爲的関連基構の最も深層の根底に根ざしているのである。

期待の体系はかくして象徴体系の媒介を経て，相互的行爲の段階に於て規範的定位の問題を提起してくる。規範的定位に於て重要な要素は価値である。価値とはパーソンズによれば「ある状況に於て眞に開かれている定位の諸二者択一間の撰択のための規準乃至標準として役立つところの分有された象徴体系の要素」[11] である。ところで上述の分有される象徴体系と行爲の規範的定位との間の根本的関係は相互行爲的定位のすべての型式と様式についても共通している。しかしそれにも拘らず，前述の三つの型態的要素即ち，認識的，関心占有的及び評価的の諸要素の相対的な優越に従ってある区別をなすことが重要と考えられる。ある意味において「動機」は行爲の満足＝損失の均衡の改善への定位，即ち関心占有的定位に存していると云える。しかし動機化的定位に於てさえ，認識的及び評価的要素を含まない行爲は，行爲的関連基構に於ては考えられない。たゞ何が相対的に優越しているかが区別の基準となってくる。しかし行爲の全体についてのこの動機化的定位の様相から価値＝定位（value-orientation）の様相を区別することは，以上みてきた如く象徴体系の役割と云う観点よりみて必要となる。この価値＝定位の様相は行爲者の満足＝損失均衡に即して行爲者に対する事柄の期待された状態，即ち目標乃至予期の意味に関するものではなく，撰択的規準それ自身の内容に関するものである。それ故この意味に於て，価値定位の概念は文化的伝統を行爲体系の

中へ明確に表現すること（articulation）の一中心様相を形成するための論理的工夫であると云える。

すべての価値は社会的関連を含んでいる。このことは上述の如く行爲に於ける規範的定位と価値の役割とから派生してくる。価値は純粋に個人的なものではなく，むしろ文化的である限りに於てはそれは事実上社会的に分有されている。たとえそれが個人に対して特異な（idiosyncratic）ものであっても，価値はそれが分有された文化的伝統への関係に於て規定されていると云うその発生の事情の故に，依然として個人に即して存するものである。しかし乍らこの社会的関連と並んで，価値規準はそれの個人の行爲に対する機能的な関係に従っても又区分される。社会的関連は動機的側面からすればすべての価値規準にとって評価的意義を含んでいる。しかし又規準の第一義的関連は状況の認識的な規定乃至関心占有的な表現或いは行爲体系の一体系乃至体系の若干部分としての統合であることもあろう。それ故価値定位に於てもパーソンズは三重の定位の様式の分類を繰返す[12)]。

・認識的規準　cognitive standards
・鑑定的規準　appreciative standards [13)]
・道徳的規準　moral standards

これらの三分類は動機化的定位の様式に対応する。第一に，認識的な場合が動機化的側面に関係するところは，状況と関心の対象との認識的関心，即ち状況を認識的に規定するための動機化についてである。他方価値定位の側面では，それによって認識判断がその正当性を査定評価（assess）されるところの規準に関係する。この規準の若干は論理の最も要素的な規準や観察の正確さの如く文化的に普遍的なもの（cultural universals）である。とにかくそれは認識的問題の二者択一的解決，即ち諸現象諸対象の二者択一的説明に於ける撰択的評価，即ち採択の規準に関する。

第二に，関心占有的事象についての規範的様相はそれほど明確ではない。勿論そこには行爲者の対象に対する関係がある方法では満足され，或いはされないという意味がある。しかし満足は行爲者が一般に規範的に定位されているところの行爲体系の部分としておこることを注目せねばならない。この一様相が価値の規範的定位の規準との関連から除かれるべきであると云うことは到底考えられない。対象の撰択と対象への態度に於ては，この様相に於ける定位の正当性と妥当性の問題が常に存する。それ故この問題は，それによって関心占有的な意義の可能性の間の撰択が爲されうるところの規準をも含む。

第三に，動機化的定位の評価的様相も又その価値＝定位に於て対応物を有する。評価は行爲体系の要素を統合する問題に関するものであり，根本的には互いに否定的な両現象を同時にとると云うことは不可能なことであり，何れかを必ず撰ばなければならないと云う二者択一の問題に関わる。認識的と鑑定的との両価値規準は勿論之に関係してくる。しかも凡ゆる単位行爲は認識的と占有的との両様相を有する。それ故認識的関心の卓越は具体的行爲を占有的な関心との関連に於て統合すると云う問題を依然として残している。占有的関心の卓越している場合も同様である。それ故行爲体系に於ては，認識的のもの，鑑定的のものの何れでもなくて，両者の様相の綜合体（synthesis）を含む評価規準の最高の焦点がなければならない。それらを道徳的規準（moral standards）と呼ぶことは妥当である。ある意味において道徳的規準は更に特殊な評価が自己自身評価されるところの條件に於て規準を構成するものである。

この意味に於ける道徳的規準が特に社会的関連を有していると云うことは又行爲体系の一般的性格から区別されねばならない。このことはあらゆる行爲体系は，たとえその人格に対する焦点がある目的にとっては非常に重要であっても，結局は具体的には社会体系であるという理由による。道徳的関連が決して独占的に社会的であるというのではなくて，社会的関連なしには，従って道徳関連なしには具体的行爲体系を全的な意味に於て統

合されたものとして考えることが不可能であると云うことである。特に何らかある行爲者の観点からすれば，相互的な権利と義務の型，或いは彼の他者との相互行爲に於てそれらを支配する規準の規定は彼の自己の状況に対する一般的定位の決定的様相を占めるものである。その社会体系に対する特殊な関連の故に道徳的規準は，社会学者にとって最大の直接の重要性を有する価値＝定位の様相となってくる。

この価値＝定位型象の分類と動機化的定位との分類との間には直接の対照があるけれども，行爲体系のこれらの二つの基礎的な様相乃至成分は，両者が本質的ではないという意味に於てではなくて，この二分類の下に含まれる内容が独立的に変異してもよいという意味に於て，論理的に独立的であると云うことを明確ならしめることは非常に重要である。例えばある対象のある「心理学的」な占有的意義の事実から何人もそれによって対象が評価されるところの特殊な鑑定的規準（appreciative standards）を推論することは不可能であり，この逆をなすことも同様に不可能である。動機化的定位と価値＝定位との間の機能の差異は次の如く対比されうる。即ち，動機化的定位の様式の分類は本質的に行爲者が「関心」を有するところの「諸問題」の分析のための枠を提供する。他方，価値＝定位はこれらの諸問題の充分な「解決」を構成するところのものの規準を提供する。これらの二つの基礎的な様式或いは段階の，独立的な変異の明確な認識は，「文化と人格」の分野に於ける充分な理論の基礎に於けるものに他ならない。実際この独立的変異の認識の失敗は，この分野に多くの困難を，特に多くの社会科学が「心理学的決定論」と「文化的決定論」の間を動搖する不安定な傾向を齎した。従ってこの独立的変異は社会体系の理論が，一方人格の理論から，他方文化の理論から独立的であると云う意味を獲得する論理的基礎であると云いうる。

註

1） Parsons, *The Social System*, p. 9.

2） unit act は行爲（action）の更に単位的に考えられたものであるが，単位作用，単位作爲，単位行爲等の訳語を適宜用いた。パーソンズは『社会的行爲の構造』に於てはかなり act の語を用いているが，ぴったりする邦語が見出せない。

3） E. C. Tolman「動物及び人間における目的的行動」“Purposive Behavior in Animal and Man” に於て用いられていると云う。

4） ドイツ語そのものは，「占有する」「あるもので包みこむ」の意であるが，一語を以て示すことは難しいとして，ロンドンで精神分析学者達は相談して，ギリシャ語の cathexis（摑む）を以てその意味を示すものと決めた。差当たってここでは「関心占有」「関心占有的」と訳したい。

Freud, *Abriss der Psycho-analyses*, 1938, *Gesammelte Werke*, vol. XVII; English Translation by James Strachey, *An Outline of Psychoanalysis*, 1949, p. 22, and A. A. Brill, *Lectures on Psychiatry*, 1949, p. 44.

5） Parsons, *The Social System*, p. 8.

6） Parsons, *The Structure of Social Action*, pp. 45, 732.

7） Parsons, *The Social Systems*, p. 8.

8） Parsons, *The Structure of Social Action*, p. 44.

9） Parsons, *The Social System*, p. 8, note.

10） Ibid., p. 11.

11） Ibid., p. 12.

12） Ibid., p. 13.

13） appreciative を評価と訳したいのであるが，既に evaluative の訳語に用いられているので，滑稽なほど生硬であるが，致し方なく鑑定的とした。

4．第三章　体系的構成

「我々は以前から，人間行動の最も一般的な理論に於て，我々が最も普通に人格（personality），文化（culture）及び社会構造（social structure）各々のそれとも云うべき三つの主要な問題の焦点があることに気がついていた。」[1] 彼はこう語っている。こゝで云う社会構造とは後に「社会体系」（social system）へ発展したものであるが，とにかく彼は人間行爲の一般的な基礎理論を設定し，それを共

通の基盤として人格，社会体系，及び文化の各理論が独立的な焦点として載っているという学問体系の構成を企てた。而してこの全体系を貫徹するものは，彼によれば行爲を以てする関連基構（action frame of reference）に他ならない。そして行爲の一般理論（general theory of action）について考察したのが，「行爲の価値，動機及び体系」（Values, Motives, and Systems of Action, co-author with Edward Shils, to include in, *Toward a General Theory of Action*, 1951）であり，上部構造三焦点の中，社会体系について叙述したのが『社会体系』（*The Social System*, 1951）である。

第一節　文化と行爲

文化とはパーソンズによれば，行爲の定位の対象であるところの象徴の型象化され，秩序化された体系であって，それは個々の行爲者の人格の内面化された構成成分（internalized components）及び社会体系の制度化された型象（institutionalized patterns）とに存するものである[2)]。之を以てみれば彼は文化を G. H. ミード（G. H. Mead）の象徴主義（symbolism）の概念に拠っている。ところで行爲体系に関連ある限りの文化の顕著な特性は次の三つと考えられる。第一に文化は傳達される（transmitted）。即ち文化は遺産乃至文化的傳統を構成する。第二に文化は習得される（learned）。即ちそれは固有の内容に於て人間の発生学的構成の表明ではない。第三に文化は分有される（shared）。即ち文化は人間の社会的相互行爲体系の，一方に於ては所産，他方においては決定要素である[3)]。即ち文化は伝達，学習等の行爲の要因又は内容となりうるし，又行爲主体に内在し行爲の原因と結果との両面に於て意義を有するものである。

第一の文化の伝達性は，文化と社会体系との間に於ける，最も理解しやすく又それだけ最も重要な区別の基準として意味がある。即ち文化は一つの社会体系に本質的に固有であるだけでなく，更にその社会体系から他の社会体系へと伝播しうる。それらの社会体系は相互に時間的に場所的に，もしくはその一方のみが異なる場合が考えられる。又この現象は個人間に於ても勿論可能であるし，却って個人を基本要素としていると云える。かの文化人類学における伝播主義（Diffusionism）は文化の特性に着目した学派に他ならない。従って文化は特定の社会体系から分析的論理的にも，又経験的実際的にも，抽象して一箇の「型態」要素（“pattern” element）として捉えうるものである。かように文化的型象，而して特にその構成要素をなす象徴的体系は「型象一貫性」（“Pattern consistency”）とも云うべきそれ自身の統合の様式を有しているものである。かくて象徴体系は，例えば認識的体系の論理的一貫性の如く，それ自体別箇の完結体たることをうる。このことは文化全体について云えることであり，文化が社会体系，人格体系から独立した体系を構成することが可能たりうる所以である。しかし乍ら具体的な社会的相互行爲体系の統合部分としては，この文化体系の型象一貫的統合の規範は，具体的行爲の状況的，動機化的要素との相互依存の要請から生ずる変形（strains）の故に，近似的に実現されうるだけである。

第二の特性はその習得可能性にある。この場合に於ける習得乃至学習（learning）とは個人の具体的行爲に於て，文化の要素の必要な統合が動機付けられるに至る過程である。このことは文化型象の要素を個々の行爲者の行爲体系の中へ組み入れることである。即ちこゝに於て，文化が社会体系のみならず個人間に於ても移動するものであることが明瞭に知られる。しかもそれは，その特性の示す如く個人が発生学的に遺伝的に獲得するものではなく，後天的に自発的には意志と努力によって，他発的には訓練と賦課によって獲得されるものである。従ってそこには習得の難易が対象の性質と主体の能力とによって決定されるけれども，その間において最初の試みから反復によって体得されるまでの時間的経過が考えられる。而して習得され終った状態は，それが必要とされる場合に

於て，意志さえあれば些少の努力乃至その必要なしに経験の想起によって任意に再現しうることに他ならない。従ってこゝには学習の成果を有効ならしめるものとして記憶力がその背後に存する。更にその上に考えねばならないのは，それらの基礎としてひろがっている社会的関係がある。即ち文化の習得を必要且つ可能とする原因は社会的相互関係であり，その習得の成果を意義あらしめるものも社会的相互関係の面に於てである。

第三の文化の特性としてその分有性がある。換言すれば文化はその一つの所在を人格体系に求める。分有の様相の第一は同時に数種の文化要素が同一人格に於て共存しうることである。第二は分有体系に於ける有機体的，発生学的構成と非社会文化的自然環境との両條件が，分有せんがための習得に対し，従って結局はその分有状態に対し，制約を課していることである。第三に各個の行爲者は一社会体系に於ける相互行爲による高度の諸要請（exigencies）をうける。この第三の考察は文化的伝統の分有的様相の故に文化にとって特に重要である。即ち文化的伝統は，一つ或いはそれ以上の具体的な社会体系によって生み出されねばならないし，又それが現実に活動している行爲体系の一部をなす時にその文化的伝統は機能している。それは死せる過去の存在ではなく，生きている現在の存在である。我々はこゝに文化は分有の形態として社会的関係と密接な関係を有するからこそ，その現在的意義を持つと考えられる。

こゝに考えられるべきは，既に文化的伝統に関して考察した如く，分有の語は社会体系に関する面と個人に関する面とを併有していることである。即ち分有とはその所有主体が分散した各個人であることを意味すると同時に，それが各個人において共通に所有されていると云うことが社会体系からみれば，とりもなおさず社会的に一箇の所有云わば共有財産に他ならないことを意味する。それは一箇の完成品を分解して各人が分業的に分担していると云う形態ではなく，ライプニッツのかのモナドの理論の如く，一箇が同時に全体の反映であるという如き関係である。即ち各個人はその相互的行爲関係に於て，他者から表示された意志を自己の分有的に認識把握している文化的象徴体系に照合して理解する。かくて円滑なる伝達その他の相互関連的行爲に於て，文化そのものも存在意義を維持しうる。

以上あげた三つの行爲体系に関連する文化の特性を比較してみるならば，伝達性と習得性は授受の関係に於ける主体客体の様相として云わば表裏をなすものであり，共にその際の動作過程である。之に対し分有性は静的な保持様式に於てみたものと云える。伝達，習得及び分有は個々の行爲者に於て妥当するが，之を集合的に，個々の行爲者の位置に代るに社会体系を以てしても妥当しうるであろう。即ち文化の，一社会体系から他の社会体系への総体的な伝播（伝達），攝取（習得），及び保持（分有）の現象がみられる。

しかし乍ら以上の三つの特性は文化の行爲体系に関連する限りの様式，即ちその移動や存在の様式ではあるが，文化そのものの内容的な一般規定ではない。パーソンズはその内容を，相互行爲に於て機能するところの分有された象徴体系（symbolic system）又は分有された象徴型象（symbolic pattern）であるとする[4)]。即ち文化は象徴的であることを條件とする。象徴とはある対象に意味を附与することである。その意味は対象に不即しかも不離のものであると同時に抽象的，主観的な理解に関わる事柄である。そこには当然に意味を附与する主体の存在を予想する。象徴の本質は紋章や学校の建物にあるのではなく，紋章を紋章として理解且つ承認する人間，或いは学校の内部で認識しつゝ活動する人間は勿論，外部からその意味を認識し承認する人間，その彼等が与える意味にこそ象徴の本質があるのである。たとえそれが載するに掌中を以てするものであっても，その意味的内包は大海にも比すべき経験的乃至理念的なものに相当するものを代表することも可能である。

しかもこの意味が社会的に文化としての資格を得るには，独善的な恣意的な一人合点ではなく所謂通用するところの意味，即ち分有された意味でなければならない。

パーソンズは彼の以前の思想に於ては理論体系を自然の体系，行爲の体系及び文化の体系の三つに分けていた。そして前二者は経験的な科学理論の体系であるとし，第三の文化の体系はそれらとは別個の独特の地位を占めるものと考えた。彼はその理由として，前二者は経験科学なるが故にそれが時間における過程に関するものであるのに対し，文化の理論はそうではないが故であると云う。即ち自然の体系は関連基構に於て空間と関連して時間を含み，行爲の体系は手段＝目的の図式（means-end schema）に関連して時間的様相を含む。しかるに文化は非空間的且つ非時間的である。それは永遠の対象（eternal objects）即ち時間の範疇が適用されえないところの対象である。なる程具体的な事象は文化的面を有しているかもしれないが，それは象徴としてのみ物質的に理解しうる限りに於てゞある。眞の文化たる永遠的対象は象徴の意味であり，それは個人の「心の中に」おいてのみ存する。それは外部的な観察ではなく，象徴的表示の理解によってのみ見出されうる[5)]。

パーソンズのこの文化についての概念はこゝで述べている行爲の概念と同様に，現今では必ずしもそのまゝではないが，この文化の超時間性の考察は我々の関心をひく。この考えは前述の文化の伝達性，学習性及び分有性にみられる如く，何か我々から理念的に外在したものであって我々は単にその継承奉仕者にすぎないかの考えを招きやすい。しかし乍ら文化の担い手たる我々を排除するならば文化の存在も又不可能とされる。たしかに数千年前の遺跡は我々に文化の理解を得せしむるものではある。しかし乍らそのような博物館的な文化は，所謂文化のための文化，従って我々からみるならば，魂の去った亡躯と同様に，そこで我々がみるのは我々の中で機能している文化，我々の創っている文化ではなく，文化の形骸である。我々が理解する文化は社会の中に，従って行爲の中に存するものである。普通に文化は所産であると云われるが，それが文化たるためには，所産となると同時に又我々の行爲に於て維持されることを必要とする。我々は生活する。従って所産が我々の生活に奉仕する限りに於て生きた文化であって，逆に我々がその所産へ奉仕してその利子を殖やすことではない。之は芸術，宗教といえども例外ではないだろう。所産の継承と維持とは，未来の子孫をも含めて我々の必要のためにするものである。もしそれが単に所産にとゞまる限りにおいては，古代人の食べた貝の殻が堆積して貝塚となるのと同様に，それは我々の活動行爲の随伴的な結果にすぎないものである。所産が文化であるのは我々がそれに認識的に価値を附与し，それが社会的に是認されているからである。ギリシャの遺跡は我々にとっては文化の所産である。そしてそこに於て意味があるのは彫刻に於ける古代人の一行為の表現であって大理石そのものではない。そして我々がそれを美として認識する行爲によって，我々にとって意味が生じてくるのである。我々に認識されるまでの地中に埋れていた空白の時代は，認識される可能性を條件的に有していたにすぎない。文化は事物の存在現象そのものとは別個のものであって，附与された意味にこそあると我々は考える。従ってそれは必ずしも物質的素材型象を必要とせず，我々が抱懐するところの体系付けられた理念も文化たりうる。パーソンズが文化を非時間的なものとしたのは，文化を静的固定的な既成品と解したからではない。むしろ彼は文化が個人の心の中にあると云っているように，その意味では文化は人間と共にその壽命を有しているものである。そして伝達と学習の可能性によってその制約を脱して壽命を延長するにすぎない。又文化と行爲との関係に於ては，文化は行爲の所産であると同時に行爲を條件付けるものでもある[6)]。パーソンズの文化の非時間性の考えに対して，我々は文

化を，その創造過程をも文化と考えるが故に，時間的様相を有しうると考える。

行爲の体系の理論にとって必要な文化の特性は，その内容に於けるよりもその属性たる伝達，習得，分有の三特性が重要な意義を有するが，我々は更にその創造をも之に加えたい。文化型象の体系が一社会体系内の諸行爲者によって創造され，習得され，機能せしめられていると云うことは，人格理論の段階だけでなく，更に社会体系の基構の理論の段階に於てもの，具体的な状況に関連せる動機の分析を俟って初めて理解できるのである。パーソンズが特に価値定位を設けたのは，人間が文化を担った動物である（man is culture-bearing animal）という根本的事実の意味をその行爲理論の体系の中へ含ましめるものであった[7]。かくて文化が現実に於て生きている有様を把握するには，人格と社会体系との両理論を必要とする。何となればそれらの三者の何れもが，行爲の理論を共通の基礎としているからである。

第二節　人格と行爲

行爲体系の一般理論の上に載るところのもう一つの焦点は人格の理論である。文化の体系がその統合の根底を型象一貫性におくのに対し，人格は型象一貫性プラス動機化的均衡の機能的充分さである。社会体系と人格とを区別するものは相互行爲ではなくて，組織と統合の機能的な焦点に他ならない。従って人格の概念が重要な意味を持つのは，その意識と統合の焦点たる有機体である。人格は相互行爲をなす生きている有機体（a living organism）の関係的体系である。而してその統合の中心は経験的実体としての有機体＝人格単位（organism-personality unit）である[8]。即ち人格はその外形的範囲を生ける精神と肉体とに全く一致させている。一人が一個の人格に他ならない。それ故人格は「具体的な人間個人」（a concrete human individual）[9]である。即ち，既に第一章第一節の行爲者の考察に於て境界保持体系（boundary-maintaining systems）として考察した如く，それは肉体を有する[10]。人格の基構はその単位の機能的問題に関連して理解され，定式化されなければならない。人格の概念は人間行爲の事実を述べるための記述的関連基構（descriptive frame of reference）とみなされる。この点で人格は一人の行爲者に関して記述された観察しうる単位行爲（unit act）の総体である。しかし人格は行爲の有機体的体系であり，この点で人格はばらばらになされた単位作爲から演繹しえないところの特質を有しているものである[11]。かくて人格は有機体プラス何物かである。そしてこの附加物が画一的な生物学的人間を個性的な人格たらしめているものである。それは心理的諸過程であり，しかも掛替えのきかないその人身たるの性質であり，この点人格は最も特徴的に云えば性格の総約であると云いうる。その最も中心的なものは結局自我意識に帰着する。この自我意識は幼兒に於ては明確なものたりえず，そこでは単なる外部に対する一方的な自己主張であって，障害のない限り欲求の趣くまゝを無思慮に主張するのみである。それが次第に自意識的なものへと形成されてくるのは，他の人間を自己の類型として，即ち自己とある様式に於て同じものであり乍ら，しかも自己とは別個の存在であるとして考え，こゝに自我，他我を発見するに至る。かくして他我を自我の反映としてみることからやがて自己を客体として考察すること，即ち反省を可能ならしめるに至る。「人間が自我を有ち個性的と成ることが，他への関係を止揚するものでなく，人間に於て見られる此の最高の獲得そのものが抑も社会的である……我々は此処に人間の本質的構造を看取する。これにとって関係はその外にあるものでなく，そのなかにあるものである。そして，人間の実在性こそ関係の実在性を基礎づけるものであり，……我々は人間を確認することによってはじめて社会の概念を最も正当に構成しうる見地に立つにいたるのである。」[12]（仮名づかい原文のまゝ）

人格は自我意識のみではなく，更にそれに伴っ

て自己目的を自己意志によって求め之を自己のものたらしめんと努力する。それは一応自己完結的であり，その損失も獲得も自らの責任と権利を以て覆われるものである。それは意思決定論，非決定論を別としても，少なくとも自我意識の側にあっては意志は自由であると主観していることに変りはない。かゝる人間の行爲活動の過程に於て，そこには自我意識形成と並行して，性格がその先天的なものの他に後天的なものも附帯せられ，両者は混融してその人格独自の性格が形成される。かくして他我との区別の明確さは，その内面的主観的な自我意識と外面的客観的な諸性格と容姿と相俟って独自の人格を形成するに至る。かくして，たとえ性格は類型的に分類把握することが必ずしも不可能でないとしても，自我意識の本質そのものは簡約不能（irreducibility）であり，こゝに人格的人間を一個の個人として把握する所以がある。

人格の期待体系が社会化の過程において組織されてくるところの中核は，他者の期待の体系との相互捕捉（interlocking）である。従って社会的に構造付けられた関係性の型象は，もはや諸行爲者の動機化体系の結果とは考えられず，直接に根本的に動機化体系の構成そのものである[13]。かように人格はその社会化としての生成過程に於て既に社会関係の中におかれるが故に，即ち社会化の中途にある子供そのものが社会におかれるが故に，社会は既成的なものの関係というよりも，生成の中途そのものが露出されつゝ関係付けられているのである。かように人格は生成的に社会関係的な段階に於て形成されるものである。即ち特定の行爲者個人が包含されるところの関係は単なる囲繞的状況的な意義のものではなく，直接に他の諸行爲者との相互行爲関係から所以されるところの諸人格そのものの構成体である。それが社会化の途上の過程にある子供にあっては役割の習得そのものが，同時に役割の発揮でさえある。

しかし乍らこれらの諸関係が諸個人の集団に対して画一的な方法に於て社会的に構造付けられている場合でさえも，これらの画一的な「役割」（role）が構造付けられているところの方法は，異なった人格の各々について同一の方法で構成されているのではない。即ち社会関係における画一的な役割は異なった人格体系の中へと統合されているが故に，どの二つの人格に対しても「同一の事柄を意味している」と云うことにはならない。人格が画一的役割に対する関係は，相互依存（interdependence）と相互貫徹（interpenetration）の関係であって，人格体系の特質が外在的作用目的によって作りあげられた役割の中へ包攝されてしまう関係ではない。

こゝに於てパーソンズは「役割」の概念を持って来ているが，之は地位（status）と対応する概念であって，リントン（R. Linton）の提唱するところである。地位が社会関係内に構造的に位置された個人のある期間固定的な対社会関係の様相であるのに対し，役割はその機能的な隠顯する（active vs. latent）様相である[14]。之を別な面からみるならば，人格を所有する個人が社会体系と関連されている局面であると解することができる。自己にとっての役割は他者にとっては期待乃至是認（expectation, sanction）であり，役割＝期待（role-expectation）は同じ一箇の事象の表裏の関係として対応するものである。それは社会的には相互の間に利便（facilities）を授受する。かくして之が相互の同等の交換であれば協力（cooperation）であるが，もし一方的なものであれば損失の側と獲得の側とで処分対報酬（disposal vs. remuneration）である[15]。かくして人格は社会体系との関連の面においては分業的に位置と任務を与えられ全体的な統制の下に関連付けられているものであるが，決して人格そのものの独自な個性を否定するものではない。

第三節　社会体系と行爲

パーソンズによれば社会体系（social system）とは，多数の個別的行爲者の相互行爲的型象

（interactive patterns）の持続乃至秩序的な変化過程に関連せる，行爲諸要素の組織の様態（a mode of organization of action elements）である[16]。又，社会体系は「多数の相互作用する個人を含む社会行爲の体系」[17]或いは，「行爲者間の相互作用行爲の過程の体系」[18]であると云い，更に端的に云えば「行爲の体系の組織」[19]でさえある。それは動機付けられた人間行動の体系であって文化型象の体系ではなく，文化を要素的に含むが文化の体系を含まない[20]。我々がこゝで注目すべきは，彼の社会体系の概念はそれがあくまでも社会関連的な相互行爲の観点からするものであり，しかもその構成成分は行爲要素に他ならないことである。彼の社会体系の概念は行爲の概念が徹底して一貫している。之は他の社会体系乃至社会体制の概念を唱える人々に比べて著しい特色である[21]。尤も社会体系の語は更に要素的な意味で用いられるけれども，こゝでは同一状況に対し定位された多数の行爲者の相互行爲の体系に限定され，その状況は共通に理解された文化象徴の体系を含んでいる。そこで種々の要素を含めつゝ社会体系の概念を云いなおすならば次の如くなる。

社会体系とは少なくとも物理的，環境的様相を有する状況に於て互いに相互行爲する多数の個々の行爲者に存するものであり，その行爲者は「満足の最適化」（the “optimization of gratification”）[22]への傾向に於て動機付けられ，又彼の他者をも相互に含む状況は，文化的に構造付けられ又分有された象徴の体系に於て限定され，又媒介されているものである[23]。

社会体系は等しく行爲の組織様態であっても，完結的なものと部分的なものとに分けられる。前者は，長期の持続のための本質的な機能的必要條件を，それ自身の体系内の資源から自活的に補充する社会体であって，之を社会（a society）と云う。そしてこの前者の方が社会体系のより規範的な型である。何となれば社会体系は体系の経験的な組織が基本的焦点であるからである。そしてそこでは社会体系の持続の本質的な様相は生物学的生殖と社会化（socialization）とによる。次代を継ぐ者の補充（recruitment）に他ならない。こゝでは「社会」が他の「社会」と相互依存でないということよりも，むしろ社会が独立的に維持する体系のすべての構造的，機能的基礎を含むべきであると云うことが本質である。従って「社会」以外の社会体系はすべて「部分的な社会体系」（partial social system）である。そしてこの部分的社会体系は何らかの社会の中に必ず位置されている。従って，部分的社会体系にとって重要なのは全体社会の中で如何なる位置におかれているかと云うことである[24]。

抑も社会体系の概念は，パーソンズがヘンダーソン教授（L. J. Henderson）とパレト（V. Pareto）の理論について論じあった時に明確なる姿をとってきたものであり，そして他方キャノン（W. B. Cannon）の生物学理論からパレトの分析的機械的方法の難点を補うに足る「構造＝機能」（structure-function）の方法論のヒントを得た。そしてその結果，行爲の構造的＝機能的体系（structural-functional system）としての社会体系を形成するに至ったのである[25]。

パーソンズが「構造的＝機能的」方法をとったのは，現在の段階に於ては完全な動学的理論を行爲に於て展開することは不可能であるため，云わば次善の方策としての理論の型である。

粗雑な経験論は，現象を体系的に考えられた経験的体系の部分として，或いはその中での過程として記述することによって克服されうる。その際用いられる一組の記述的範疇は筋のたった方法で具体的体系のすべての関係的部分乃至様相への適用を可能とする注意深く且つ批判的に作り出された諸概念の体系である。之は体系の一部分と他部分，一状態と他状態，更には一体系と他体系等の間の比較と移行を可能にする。この一組の記述的範疇は，動学的普遍化が直接に理論体系の一部であると云うことに他ならない。このことは最も重要

である。このことは行爲的関連基構の動機化的様相が遂行する。かくして心理学において発展した動機化についての業績をとり入れることができる[26]。

社会体系にとっての範疇の体系では「構造的」様相が特に重要である。構造的範疇の体系は動学的分析のための配置構成（setting）を与える概念体系である。動学的知識が拡大されるに従って，構造的範疇の独立的な説明の意義は消滅する。それにも拘らずその科学的機能はやはり重要である。

社会体系の重要な問題に関しての我々の知識は不完全である。之を最も効果的に補う方法はその知識を社会体系に関する関連基構の体系へ関連付けることである。之が機能の概念が導入されてくるところである。又他方動学的過程を社会体系に於て構造的に位置せしめなければならない。しかしそれ以上に重要なのは動学的過程についての一般化の意義の検証である。之は過程についての機能的関連という形態をとる。それは種々の動学的過程から社会体系の構造，ひいてはその持続や変動に対して意義あるものを弁別することである。社会学理論に於ける動機化的動学は社会体系の機能の様相及びある構造型の持続や変化について説明することを要する。動機化的問題を基構に即して定式化することは，如何なる段階の動機化的知識も社会体系の機能の問題に役立つという関連を設定することにとって必須である。

さてパーソンズは社会体系を構成する単位として四つあげている。第一は単位行爲乃至作用（act）であって，之は最も根本的なものであり，すべての行爲体系に存する。第二はやゝ高級な単位で，役割＝地位（status-role）である。それは社会体系の構造にとって本質的な相互作用過程に含まれる行爲者間の関係の構造である。社会体系はこのような関係の網に他ならない。従ってこゝで重要なのは，型象化された相互作用過程への行爲者の参加である。この参加の位置様相（positional aspect）が地位で，過程的様相（processual aspect）が役割である。両者は一つの事柄の表裏であり，ある人が他者の定位の対象となる場合それは地位の意味であり，ある人が他者へ定位するとき彼は役割を演じているのである。しかし乍ら役割も地位も共に行爲者自身の一般的属性ではなくて，社会体系に属する単位であり，ある人が偶々そこにいたので役割と地位がその人の属性の如く見えるだけのことである。第三に更に高級な単位は行爲者（actor）である。行爲者は云わば多くの地位と役割との集束者（bundle）である。しかし行爲者の概念は人格とは別個のものである。何となれば社会体系の理論と人格の理論との間には不可約性が存するからである。第四に集合体（collectivity）は各行爲者の特殊の地位を各々から共通に抽いて集めたものである。この点地位と役割は，個人の行爲体系のものであると共に，集合体のそれでもある。かくして社会体系の組織の二つの交叉する様態（two cross-cutting modes）が作られる。即ち境界保持体系（boundary-maintaining system）を通じての云わば構造的な傾列であり，他は扇形部分（sector）を通ずる云わば機能的な連鎖である[27]。

而して以上の社会体系の諸単位が社会体系へと組織化されてくるためには，そこに於て社会体系に関する機能的必要條件を考慮することが必要とされる。即ち，まず初めに社会体系は前提的に生存の段階に於て，その成員の生物学的，心理学的欲求を充足させなければならない。そして更に進んで社会的な段階においては，二つの主要な焦点が見出される。即ち第一は，秩序の問題であり，そこに於ては各人の競争や協力等の諸活動の調整を必要とする。この條件がみたされることによって，各人は全体の社会体系に於ける彼の機能を通じて各人相互のために貢献しうることとなる。第二は動機化の充分さの問題であり，社会体系はその成員のある限度以上の人員が，社会体系にとって必須の役割を有効に果すことによって，初めて機能的に活動できるのである。かくしてこの個人から社会への要請と社会からその成員に対しての要請との二つの焦点から，更に詳細な機能的必要

條件が派生してくる[28]。

かくして行爲に関連しての社会体系の機能的必要條件は行爲要素の制度的統合へとすゝむ。そこに於ては価値＝定位型象が考慮され，個人の社会に対する役割と，社会の，即ち彼以外の社会構成者たる諸個人からの期待との合致が要請され，かくしてそこには是認（sanction）が彼の役割に対して与えられる。そしてそれらの要素的状況が制度（institution）へと凝成される。従って制度とはパーソンズによれば，制度化された役割の諸統合の複合であり，別様に云えば身分＝諸関係の複合と云うことができる[29]。そしてこれはパーソンズの問題とする社会体系概念に於て戦略的な構造的意義を有するものである。従って社会学理論の中心的関心は，制度化の諸現象に関わると云うことができる[30]。

而してその際問題となってくるのは，行爲定位の型，文化型象，及び制度等の型と様式である。概述すれば次の如く表示される[31]。

A　行爲の動機化的定位の様式
- (1) 認識的
- (2) 関心占有的
- (3) 評価的

B　行爲の価値定位の様式
- (1) 認識的
- (2) 鑑定的（appreciative）
- (3) 道徳的（体系統合的）
  - (a) 自己統合的（個人的）
  - (b) 集合統合的（社会関係的）

C　文化型象の型
- (1) 信念体系（認識的意義の卓越）
- (2) 表現的象徴主義の体系（関心占有的卓越）
- (3) 価値定位規準の体系（評価的卓越）

D　行爲＝関心の型（文化型の対応型と結合せる動機化的様式の卓越）
- (1) 認識的関心（「認知」することに於ける）
- (2) 適応的関心（対象からの満足を確保することに於ける）
- (3) 統合的関心（闘争を縮小し解決することに於ける）

E　評価的行爲定位の型（関心の型の卓越による評価的又は統合的綜合）
- (1) 手段的（目標のある占有関心，認識的卓越）
  - (a) 研究的（目標としての認識的問題の解決）
  - (b) 創造的（目標としての新しい表現体系的形式）
  - (c) 応用的（知識の使用――従って a とか b ということに限定されない如何なる目標もの関心における認識的関心の優越）
- (2) 表現的（表現的象徴主義の型における欲求傾向の「演出」（“acting out”）
- (3) 道徳的
  - (a) 自我統合的
  - (b) 集合統合的

F　価値定位型を具体化した制度の型
- (1) 関係的制度（関心内容から独立的な如き相互の役割＝期待の規定）
- (2) 規制的制度（目標と手段に関する「私的」関心追求の合則的限度の規定）
  - (a) 手段的（共通の価値による私的目標の統合，合法的手段の規定）
  - (b) 表現的（許容しうる表現行爲，状況，人間，場合及び趣好の規範の規制）
  - (c) 道徳的（個人的規範又は下部集合に対する道徳的責任の許しうる範囲の限定）
- (3) 文化的制度（文化型の受容への義務の規定――私的受容の制度化的遂行への改変）
  - (a) 認識的信仰
  - (b) 表現的象徴の体系
  - (c) 私的な道徳的義務

更に何らかの行爲は次の五つの変異型象（pattern

variables）に関して撰択される[32]。

（1）満足対規律の対抗
　親近性対感情中立性（affectivity vs. affective neutrality）
（2）私的関心対集合関心の対抗
　自己定位対集合定位（self-orientation vs. collectivity-orientation）
（3）価値定位規準の型の撰択
　普遍主義対個別主義（universalism vs. particularism）
（4）社会対象の諸形態間の撰択
　達成対帰属（achievement vs. ascription）
（5）対象における関心の領域の限定
　特殊性対拡散性（specificity vs. diffuseness）

個々の個人の行爲定位乃至役割限定はこの対立的各傾向の何れかに属するものである。右の中，帰属と達成の概念はリントンの提唱したものである。又普遍主義（例えば技術的能力や「法律の規則」（“rule of law”）の如き）と個別主義（血縁関係や友情関係の如き）の対称性，及び経済的交換の如き機能的特殊性と結婚の如き機能的拡散性の対照はテンニース（F. Tönnies）のゲマインシャフト＝ゲゼルシャフトの考察に示唆されたものである[33]。

そしてこれらの型象変異が組み合わされて具体的な体系へとすゝめられる。そして窮極的には社会構造の型もこの型象変異の適用によって，（一）普遍的達成型　（二）普遍的帰属型　（三）個別的達成型　（四）個別的帰属型の四つの主要な型に分けられる[34]。

これらのパーソンズの分類方法はマックス・ウェーバーの決疑論的（kasuistisch）方法に大いに示唆されているように思われる。

註

1）Parsons, “The Prospects of Socilogical Theory” *American Sociological Review*, 1950, Feb. p. 9.
2）Parsons, *The Social System*, 1951, p. 327.
3）Ibid., p. 15.
4）Ibid., p. 11.
5）Parsons, *The Structure of Social Action*, 1937, p. 762.
6）Ibid., p. 764.
7）Parsons, “The Prospects of Sociological Theory,” *A. S. R.* 1950, Feb. p. 9.
8）Parsons, *The Social System*, p. 17.
9）Parsons, *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, 1949, p. 245.
10）Parsons, *The Social System*, p. 543.
11）Parsons, *The Structure of Social Action*, p. 746.
12）新明正道著『社会本質論』1942 年，67 頁。
13）Parsons, “The Prospects of Sociological Theory”, *A. S. R.* 1950, Feb. p. 10.
14）Parsons, *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, 1949, p. viii.
15）Parsons, *The Social System*, p. 71.
16）Ibid., p. 24.
17）Parsons, *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, p. 6.
18）Parsons, *The Social System*, p. 25.
19）Parsons, *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, p. 33.
20）Parsons, *The Social System*, p. 548.
21）武田良三氏はパーソンズ等の Social System の概念を援用して自己の社会体制の学説をたてておられるが，たゞ，氏の『社会学の構造』（1952 年）を執筆の頃は，パーソンズの「行爲の価値，動機及び体系」及び『社会体系論』はまだ参照される機会を得られなかったとみえて，かなりパーソンズ等の理論を導入されておられるが，肝心の社会体制に於て焦点が聊かぼやけて単に問題提起に終られていることは当然のことと思われる。氏は同著に於て「社会体系」の語は客観的面が表現されるに乏しいとして「社会体制」の語を用いておられる（同書 258 頁）。
　又，福武直氏は近著『社会学—社会と文化の基礎理論』1952 年（日高六郎共著）に於て，社会体制を以て社会制度間の相互的関連を示すものとされている（同書 84 頁）。ここではパーソンズの如く行爲が徹底して一貫していない。しかし同氏は，同書の別の場所で，それが社会集団間の相互的関連をも示すものとされていてこの点明瞭でない（同書 84，148 頁）。及び福武直『社会学の現代的課題』1948 年，17 頁。
　我々は社会体制の語が経済学等で資本主義的社会

体制等の如く安易に用いられているので，社会体制の語が社会学に於てもう少し成熟するまで待ちたい。

22） optimization of gratification, ここでoptimizeとは「最上のこととして賞揚すること」の意があり，高田保馬博士の結合上位説，新明正道教授の社会の本質を結合関係に置いてみる立場は之に関連してくると思われる。

23） Parsons, *The Social System*, p. 5.

24） Ibid., p. 19.

25） Parsons, *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, pp. viii, 5.

26） Parsons, *The Social System*, p. 20.

27） Ibid., pp. 24−26.

28） Ibid., p. 28.

29） Ibid., p. 39.

30） Ibid., p. 548.

31） Ibid., p. 57.

32） Ibid., p. 67.

33） Persons, Prospect of Sociological Theory, *A. S. R.* 1950, Feb. p. 10.

34） Parsons, *The Social System*, p. 181.

5．結　　語

以上我々はパーソンズの行爲体系の理論を考察してきたのであるが，そこにはかなり巧妙な対応が存している。即ち彼は行爲の理論の経験的焦点を人格，文化，社会体系の三つとしたのであるが，一般的に行爲を定義する際に，それは行爲者＝状況体系に於て行われる。そしてこの行爲者，状況，体系が夫々類比的に，行爲者が別の様相からみれば人格であり，状況乃至体系はその中に文化的要素を包含し，それらの関係付けたる体系的様相は，社会体系に関連してくると云える。そして又，行爲が定位してそこに動機化的様式と価値関係的様相とに分けて考えることができるが，之はその動機付け的定位は，云わば人格における心理的様相に焦点を合わせたものであり，価値定位様式は社会的な文化的象徴体系が個人行爲者に取り込まれる関連に於ての様相，即ち文化との関連に於ける部分であると云うことができる。パーソンズも，以前その定位様式を構想した際，認識的（cognitive），目標志向型（goal directed），感情的（effective）の三つにその様式を求めたのであるが，その後，認識的（cognitive），占有的（cathectic），評価的（evaluative）に改められ，そしてこの動機化の定位様式の他に，第四の欄として価値（values）を加えて行爲体系の構造的要素の表式（paradigm）を構成していた。しかし之は彼にとってしっくりと合わないことが感じられて，この表式から価値要素をひき出して別個の領域を形成するに至った。之が既に述べた価値定位様式に他ならない。

もともとパーソンズにとっては，マックス・ウェーバーやウィリアム・トマスの考えと同じく，ある一つの行爲方程式（one “action-equation”）が想定されている。而してその一辺には行爲者が，他の辺には状況乃至対象の世界が位置していて，行爲者が他の辺を構成しているそれらのものに対して定位されている如き方程式である。しかし乍らそこには難点が存する。それは対象の評価の動機付け的な作用ではなくて，その行爲が評価されるところの規準（standard）としての，行爲に於ける諸価値の地位に関するものである。之はトマスとズナニエツキが態度と価値の間の基本的な区別に於て，価値を対象体系（object-system）の中へ組み込んだのに対して，彼はマックス・ウェーバーにならって，価値規準（value-standards）即ち価値定位の様式（modes of value-orientation）を行爲者の中へ入れ込もうと試みたものである。

文化，人格，社会体系との関係は相互依存であるが，これは相互に独立を前提としているものである。即ち互いに境界保持体系として独立しているが故にこそ相互依存（inter-dependence）が可能なのであって依存（dependence）とはあくまでも区別されねばならない。たゞこの三体系は各々が焦点として体系的に独立なのであって，その経験的な構成要素が別個のものであるのではない。むしろそれらは重複しているべきである。何となればそれは共通の一般的行爲理論を基礎としている

から。例えば，社会体系は文化を含んではいるが文化の体系を含んではいないし，他の体系についても同様である。文化はその点，社会体系の中に制度化された文化型及び価値定位の型象として含まれている。又社会体系の動機付け的過程は常に成員たる個々の行爲者人格の中の過程である。かくして眞の三体系間の関係は次の如く云える。第一，文化と人格は行爲者間の相互行爲の根本的過程に帰する。第二，人格と社会体系の根本的な共通の扇形部分は役割＝期待を規定する価値型象（文化）に存する。第三，斯く組織化された動機化的構造は体系としての人格と，行爲者が参与する社会体系との，両者の単位である。それは人格の欲求系列であり，社会体系の役割＝期待である。

しかし乍ら我々は，パーソンズの行爲の一般理論は社会理論のものでなければならないと考える。そしてもし文化と人格が独立した一体系をなしているならば，行爲よりも別の体系にその拠り所を正当に求めるべきであると考える。何となれば我々は，我々が経験的に捉える行爲は最も要素的なものであっても窮極的には相互関連的，従って社会的であると考えるからである。我々は経験的具体的に彼の云う行爲の一般理論を摑むことはできず，むしろそれは社会的行爲として摑むが故に，彼の云う行爲の一般理論は社会体系がその中心的意義を占めるべきであると考える。たゞこの点は，彼が他の文化体系と人格体系の二著を刊行した後でなければ確実な断定をなし難いところである。後日たち入って考察したい。